北本町谷田谷線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

高　岡　Ⅱ　遺　跡

２０１１年３月

出雲市教育委員会

高岡Ⅱ遺跡出土土器

北本町谷田谷線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

高　岡　Ⅱ　遺　跡

２０１１年３月

出雲市教育委員会

序

本書は北本町谷田谷線道路改良事業地内に所在する高岡Ⅱ遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

今回の調査では，古墳時代前期の土師器が多量に出土しました。なかでも手焙形土器は，古志本郷遺跡に続き出雲地方では2例目の出土となります。この時期の歴史を考えるうえで，貴重な資料を得ることができました。

こうした調査成果がこの地域の埋蔵文化財に対する理解，関心を高める助けとなれば幸いに存じます。

最後になりましたが，発掘調査をするにあたり，出雲市都市建設部道路建設課並びに地元の皆さまをはじめ，関係各方面からご支援，ご協力をいただきましたことに対し，心から厚くお礼申しあげます。

平成23年3月

出雲市教育委員会
教育長　中　尾　一　彦

例　言

1．本書は，出雲市都市建設部道路建設課の委託を受け，出雲市が平成21年度に実施した高岡Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，下記の期間において実施した。

平成21年（2009）11月19日～平成22年（2010）3月29日

3．発掘調査を実施した地番は，次のとおりである。

島根県出雲市高岡町416－2，417－2，418－3

4．調査体制は下記のとおりである。

平成21年度

調査主体　出雲市役所

事 務 局　花谷　浩（出雲市文化企画部次長 兼 文化財課学芸調整官）

石飛幸治（出雲市文化企画部文化財課長）

景山真二（　同　係長）

＜現地調査＞

調査指導　池淵俊一（島根県教育庁文化財課企画員）

調 査 員　遠藤正樹（出雲市文化企画部文化財課主事）

平成22年度

＜図面・遺物整理＞

調査主体　出雲市役所

事 務 局　花谷　浩（出雲市文化環境部学芸調整官）

石飛幸治（出雲市文化環境部文化財課長）

景山真二（　同　係長）

調 査 員　遠藤正樹（　同　主任）

調査補助員　勝部真紀（　同　臨時職員）

5．調査で使用したグリッドは，下記のとおり出雲市全体を大グリッド，中グリッド，小グリッドに分け細分したものを使用している。

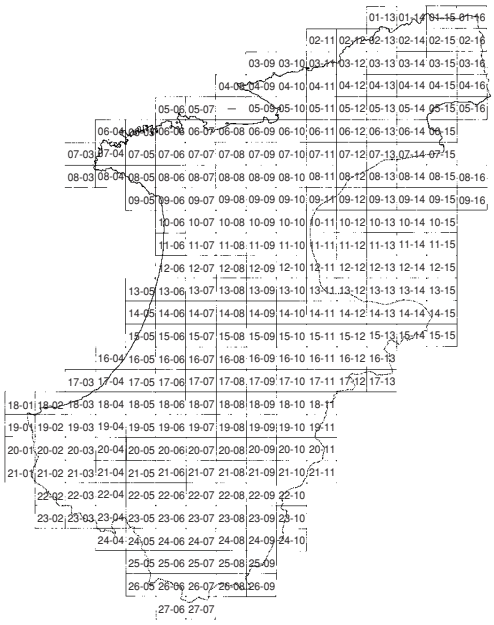
①大グリッド…出雲市都市計画図の区割（南北1.5km・東西2.0km）を大グリッドとし，グリッド名は都市計画図名（01－01～）とした。

②中グリッド…大グリッドを南北15分割（北からA～O），東西20分割（西から1～20）し，細分された100m四方のグリッドを中グリッドとする。

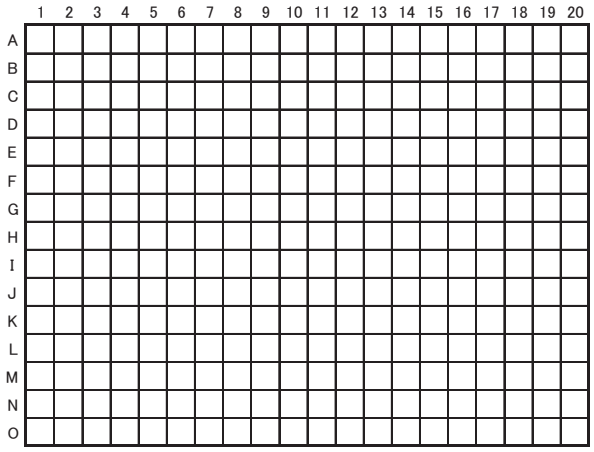
③小グリッド…中グリッドを南北20分割（北からa～t），東西20分割（西から①～⑳）し，細分された5m四方のグリッドを小グリッドとする。

以上の連記により，出雲市全ての場所についてグリッドが特定できるようにしている。なお，

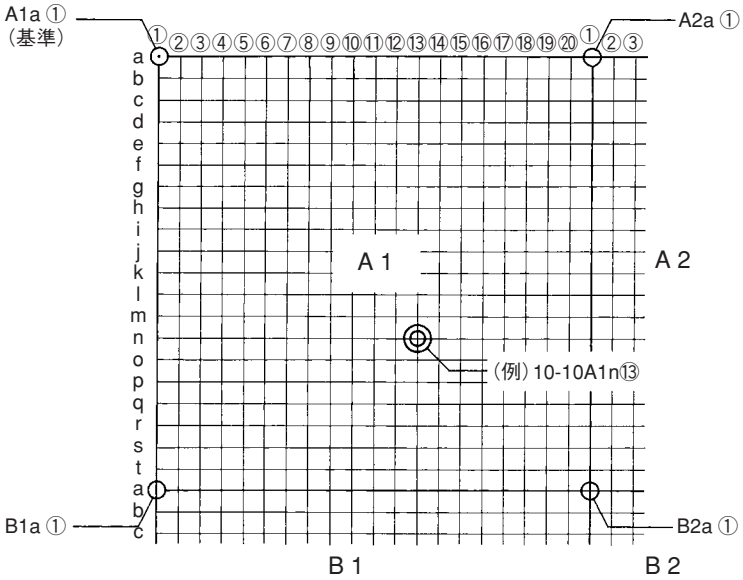
グリッド名とそのグリッドの北西角の杭名は同じ記号となる。



大グリッド配置図



中グリッド配置図（大グリッド細分図）



小グリッド配置図（中グリッド細分図）

6．本書で，示した方位は真北を示す。座標は世界測地系第３座標系に基づくものである。

7．本遺跡の出土遺物及び実測図，写真は出雲市教育委員会で保管している。

8．本書の執筆については遠藤，掲載の遺物実測図については，勝部が作成し，写真撮影については，遠藤・坂本豊治（出雲市文化環境部文化財課主事）が行った。また遺物整理・報告書作成作業については，飯國陽子，高橋節子が補助した。

9．発掘作業（安全管理，発掘作業員の雇用，機材等の借上など）については，株式会社テクノシステムに委託して行った。

目　次

第１章　遺跡の位置と環境 …… 1
　第１節　遺跡の位置 …… 1
　第２節　遺跡の歴史的環境 …… 4

第２章　過去の調査 …… 6

第３章　調査に至る経緯と経過 …… 8
　第１節　調査に至る経緯 …… 8
　第２節　調査の経過 …… 8

第４章　調査の概要 …… 10
　第１節　調査区の層位 …… 10
　第２節　出土遺物 …… 11

第５章　まとめ …… 30

挿　図　目　次

第１図　高岡Ⅱ遺跡の位置 …… 1
第２図　高岡Ⅱ遺跡の位置と周辺の遺跡 … 2
第３図　平成 17 年試掘調査　土層柱状図 … 6
第４図　高岡Ⅱ遺跡調査位置図 …… 7
第５図　調査区平面図 …… 10
第６図　調査区西壁土層堆積状況と
　　調査区土層柱状図 …… 10
第７図　出土遺物１ …… 12
第８図　出土遺物２ …… 13
第９図　出土遺物３ …… 14
第10図　出土遺物４ …… 16
第11図　出土遺物５ …… 17
第12図　出土遺物６ …… 18
第13図　出土遺物７ …… 20
第14図　出土遺物８ …… 21
第15図　出土遺物９ …… 22
第16図　出土遺物 10 …… 24
第17図　出土遺物 11 …… 25
第18図　出土遺物 12 …… 26
第19図　出土遺物 13 …… 28
第20図　出土遺物 14 …… 29

図　版　目　次

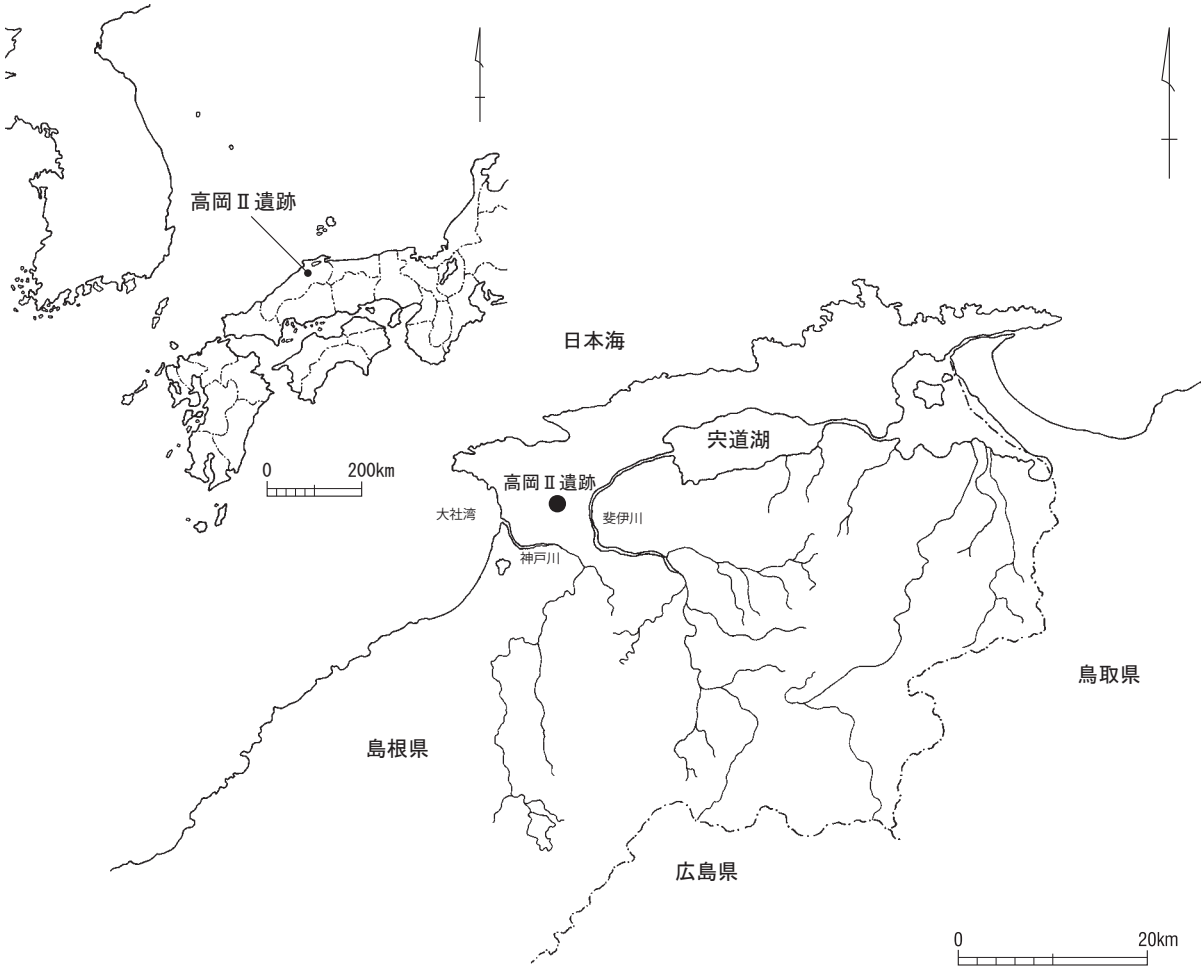
図版１　弥生時代前期出土遺物
図版２　石製品・弥生時代中期出土遺物
図版３　弥生時代中期から古墳時代前期出土遺物
図版４　古墳時代前期出土遺物
図版５　弥生時代終末期から古墳時代前期出土遺物
図版６　弥生時代終末期以降出土遺物
図版７　手焙形土器（古墳時代前期）

第１章　遺跡の位置と環境

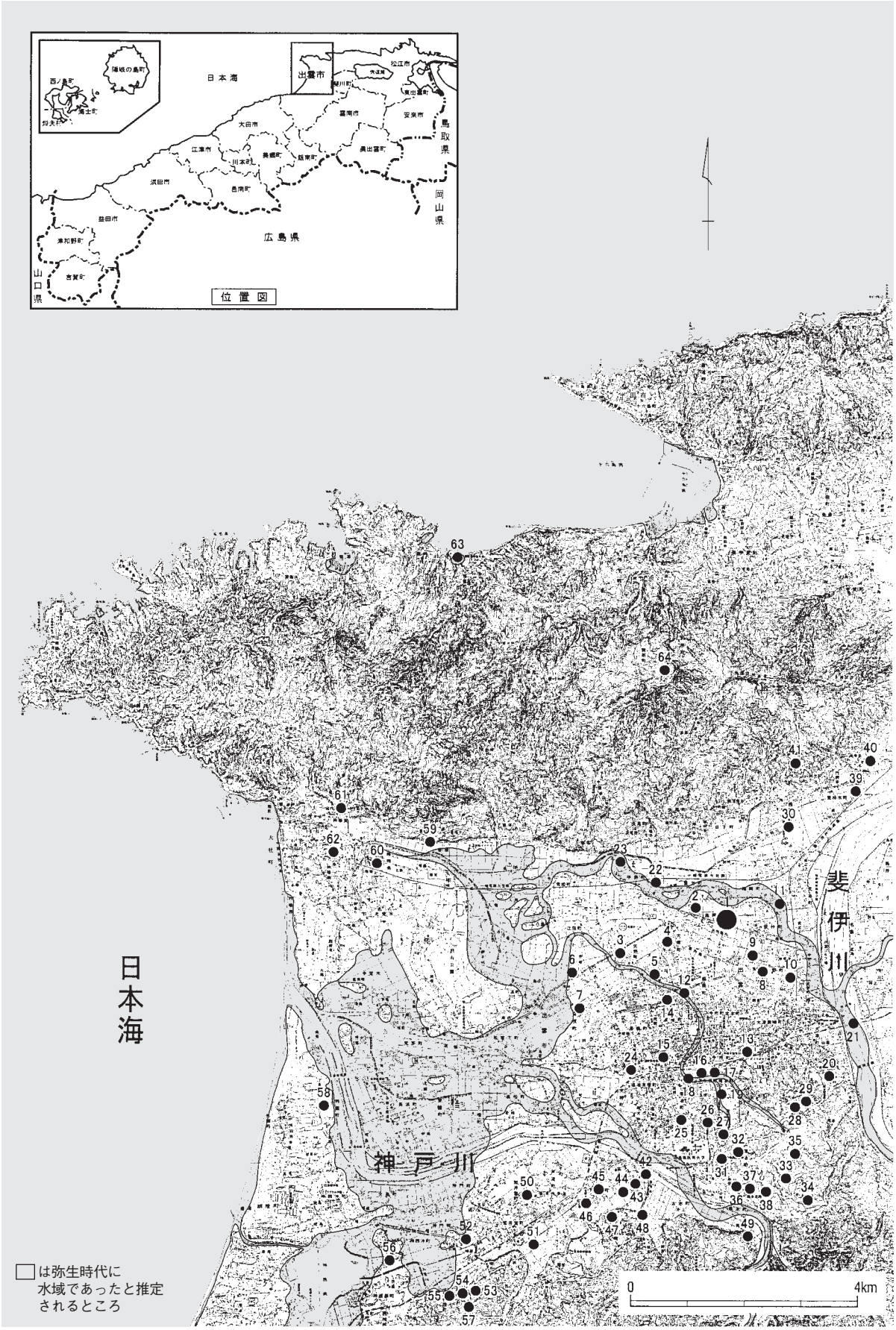
第１節　遺跡の位置

南北を山地に挟まれた出雲平野は，南側の中国山地から北流してきた斐伊川と神戸川の沖積作用によって形成された平野である。現在の斐伊川は出雲平野で東流し宍道湖に注ぎ，神戸川は西流して日本海に注いでいる。出雲平野がこのような景観となったのは，江戸時代の松江藩の水利政策に依るところが大きいが，奈良時代に編纂された『出雲国風土記』には，出雲平野西部に，周囲約 18 km に及ぶ「神門水海（かむどのみずうみ）」という潟湖が存在していたことが記載されている。この時代の斐伊川・神戸川はともに西流し「神門水海」に注いでいたようである。

高岡Ⅱ遺跡は，西流していた斐伊川の南岸（左岸）に位置し，斐伊川が形成した微高地上に立地した遺跡である。



第１図　高岡Ⅱ遺跡の位置



第２図　高岡Ⅱ遺跡の位置と周辺の遺跡（1：100,000）

表１　周辺の遺跡一覧

№	遺　跡　名	主な種別	主な遺構・遺物
1	高岡Ⅱ遺跡	散布地	弥生土器，土師器
2	高岡遺跡	散布地	須恵器，土師質土器
3	矢野遺跡	集落跡	土坑墓，縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，土師質土器，陶磁器，貝類，石斧
4	大塚遺跡	散布地	土師器
5	小山遺跡	集落跡	土師器，須恵器
6	井原遺跡	集落跡	弥生土器，土師器，須恵器
7	白枝荒神遺跡	集落跡	弥生土器，石器
8	中野美保遺跡	集落跡・墳墓	四隅突出型墳丘墓，弥生土器，須恵器
9	中野西遺跡	集落跡	弥生土器
10	中野清水遺跡	集落跡	弥生土器，土師器，須恵器
11	荻杼Ⅱ遺跡	散布地	弥生土器，土師器
12	姫原西遺跡	集落跡	木道，貝塚，掘立柱建物跡，木棺墓，弥生土器，土師器，木製品
13	今市大念寺古墳	前方後円墳	横穴式石室
14	蔵小路西遺跡	館跡・集落跡	掘立柱建物跡，墓，土坑，火処，井戸，河道，弥生土器，土師器，土師質土器，陶磁器，木製品，石器，古銭
15	海上遺跡	散布地	弥生土器，木製品
16	藤ヶ森Ⅰ遺跡	集落跡	弥生土器，土師器，須恵器，陶磁器
17	藤ヶ森Ⅱ遺跡	集落跡	弥生土器，須恵器，陶磁器
18	善行寺遺跡	集落跡	縄文土器，土師器
19	角田遺跡	集落跡	土師器，須恵器，土師質土器，瓦，羽口
20	西谷墳墓群	墳墓・古墳	四隅突出型墳丘墓，方墳，円墳，木棺墓，石棺墓，弥生土器
	西谷横穴墓群	横穴墓	土師器，須恵器，直刀
21	斐伊川鉄橋遺跡	散布地	弥生土器，土師器
22	高浜Ⅰ遺跡	散布地	弥生土器，土師器，将棋盤
23	高浜Ⅱ遺跡	散布地	土師器，須恵器
24	天神遺跡	集落跡	掘立柱建物跡，溝，壺棺墓，弥生土器，土師器，木製品
25	神門寺境内廃寺	寺院跡	礎石，瓦
26	築山遺跡	円墳・集落跡	縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，土師質土器，陶磁器，円筒埴輪
27	上塩冶築山古墳	円墳	金銅製冠，土師器，須恵器
28	菅沢古墓	火葬墓	石製蔵骨器，須恵器
29	長者原廃寺	寺院跡	礎石，瓦，土師器
30	山持遺跡	集落跡	土坑，自然河道，縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，石器，獣骨，木製品
31	上塩冶地蔵山古墳	古墳	横穴式石室
32	池田古墳	古墳	鏡，鉄製品，玉類
33	大井谷Ⅰ遺跡	集落跡	土師質土器
34	大井谷Ⅱ遺跡	寺院跡	須恵器，土師質土器，陶磁器，鉄製品，木製品，魚骨
35	上塩冶横穴墓群	横穴墓	須恵器，耳環，金銅装大刀
36	三田谷Ⅰ遺跡	集落跡・官衙跡	掘立柱建物跡，方形周溝墓，縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，墨書土器，陶磁器，石器，木製品，木簡
37	三田谷Ⅱ遺跡	円墳・土坑墓	横穴式石室，土坑墓，土師器，須恵器，刀子，耳環
38	光明寺３号墓	墳墓	石櫃
39	青木遺跡	墳墓・集落跡・官衙跡	四隅突出型墳丘墓，掘立柱建物跡，弥生土器，土師器，須恵器，土師質土器，陶磁器，墨書土器，ヘラ描き土器，木製品，金属器，神像，絵馬，木簡，人骨
40	大寺１号墳	前方後円墳	竪穴式石室，鉄製品，大刀
41	鳶ヶ巣城跡	城跡	廓
42	古志本郷遺跡	集落跡・官衙跡	神門郡庁，掘立柱建物跡，弥生土器，土師器，須恵器，瓦，羽口，貝類
43	大梶古墳	古墳	横穴式石室，金環，鉄製品，円筒埴輪
44	田畑遺跡	集落跡	弥生土器，須恵器，土師質土器
45	下古志遺跡	集落跡	弥生土器，土師質土器，陶磁器，分銅形土製品
46	宝塚古墳	古墳	横穴式石室，横口式家形石棺，円筒埴輪
47	妙蓮寺山古墳	前方後円墳	円頭大刀，刀子，馬具，鉄製品，須恵器，円筒埴輪，玉類
48	放レ山古墳	円墳	横穴式石室，須恵器，金環，圭頭大刀，金銅装刀，銀装刀，刀子，馬具，鉄鏃
49	小坂古墳	円墳	横穴式石室，石櫃，須恵器，蕨手刀
50	知井宮多聞院遺跡	貝塚	弥生土器，貝類，貝輪，磨製石器，砥石，紡錘車，鹿角装刀子，土錘，骨角器
51	浅柄遺跡	集落跡	竪穴住居跡，掘立柱建物跡，縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器
52	神門横穴墓群	横穴墓	土師器，須恵器，玉類，耳環，鉄製品
53	間谷東古墳	古墳	礫床，土師器，須恵器
54	御崎谷遺跡	集落跡	縄文土器，土師器，須恵器
55	九景川遺跡	集落跡	掘立柱建物跡，土師器，須恵器，鉄製品
56	山地古墳	円墳	木棺，箱式石棺，土器棺，土師器，鏡，筒形銅器，管玉
57	北光寺古墳	前方後円墳	土師器，馬具，鉄製品
58	上長浜貝塚	集落跡・貝塚	竪穴住居跡，貝類，獣骨，土錘，石錘，石鏃，縄文土器，弥生土器，須恵器，土師質土器
59	菱根遺跡	散布地	縄文土器，石器，人骨
60	原山遺跡	集落跡	配石墓，縄文土器，弥生土器，石斧，磨製石剣，土師器
61	出雲大社境内遺跡	祭祀跡	旧本殿遺構，旧拝殿遺構，柵跡，縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，陶磁器，玉類，鉄滓，古銭，鉄製品，土製品，木製品，羽口，瓦
62	鹿蔵山遺跡	官衙跡・貝塚	貝類，土師器，須恵器，緑釉陶器，奈良三彩，硯，腰帯金具，鉄製品，墨書土器
63	猪目洞窟遺跡	散布地	縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，鉄製品，木製品，人骨，魚貝類，貝輪
64	鰐淵寺	寺院	陶磁器，土師質土器

第２節　遺跡の歴史的環境

高岡Ⅱ遺跡（1）は出雲平野北東部にある微高地に立地する。出雲平野は斐伊川・神戸川の沖積作用により形成された平野であるが，高岡Ⅱ遺跡のある微高地は，斐伊川がかつて西流していた際に形成された微高地である。付近には高岡遺跡（2），稲岡遺跡，荻杼Ⅱ遺跡（11）などの遺跡が知られており，高岡Ⅱ遺跡同様，斐伊川が形成した微高地上に立地している。

以下，出雲平野の歴史的環境について概観する。

縄文時代

出雲平野の遺跡の初現は縄文時代早期末で，平野北西端の菱根遺跡（59）と平野西部の砂丘下にある上長浜貝塚（58）が知られている。その後も前期末から中期にかけて上ヶ谷遺跡（斐川町）が知られるが，平野南部には，中期の土器が出土していた三田谷Ⅲ遺跡がある。後・晩期になると，平野縁辺部を中心に遺跡も増え，平野南西部に御領田遺跡，三部竹崎遺跡，南部に三田谷Ⅰ遺跡（36），築山遺跡（26），南東部に後谷遺跡（斐川町），北西部に原山遺跡（60）が出現するほか，平野中央部においても矢野遺跡（3），善行寺遺跡（18）などの遺跡から遺物が出土している。

弥生時代

弥生時代になると，平野縁辺部だけでなく，神戸川と斐伊川によって形成された微高地上にも人々が進出していった。

弥生時代前期には，矢野遺跡，原山遺跡が引き続き営まれるほか，古志本郷遺跡（42），蔵小路西遺跡（14），中野美保遺跡（8），山持遺跡（30），青木遺跡（39）などでも前期の土器が出土している。

中期になると，微高地上に広範囲にまとまった大規模集落が営まれるようになった。天神遺跡(24)，古志本郷遺跡（42），下古志遺跡（45），田畑遺跡（44），白枝荒神遺跡（7），知井宮多聞院遺跡（50），小山遺跡（5）などの遺跡が出現し，出雲平野全体に集落が形成される。大規模集落の形成に伴い，権力者を埋葬する墳墓も巨大なものが出現する。青木遺跡（39）からは，初源期の四隅突出型墳丘墓が検出されている。

後期になると，大規模集落の拡大とともに，墳墓では青木遺跡で四隅突出型墳丘墓が引き続き造られたほか，中野美保遺跡でも造られた。平野部に四隅突出型墳丘墓が広がる一方，平野南側の丘陵上では，西谷墳墓群（20）から出雲最大規模の四隅突出型墳丘墓が確認されている。西谷３号墓はその出土土器より吉備や北陸との交流があったことが指摘されている。三田谷Ⅰ遺跡からは出雲地方では珍しい方形周溝墓も検出されている。

古墳時代

古墳時代に入ると，多くの集落遺跡は衰退するが，古墳中期に神戸川東岸南部丘陵地の三田谷Ⅰ遺跡で多量の遺物とともに竪穴住居跡が確認されているほか，斐伊川西岸丘陵にある長廻遺跡からも竪穴住居跡が確認されている。また平野北東部の山持遺跡（30）では，古墳前期から中期にかけての掘立柱建物跡や玉作を示す勾玉・管玉が確認されている。しかしこの時代の集落の様相には不明な点も多い。

一方，出雲平野の古墳は，古墳時代前期末に出現する。県内最古の前方後円墳である大寺１号墳(40)，筒形銅器や鏡をもつ山地古墳（56），古墳の主体部から布が付着した鉄剣が出土した浅柄Ⅱ遺跡，西谷墳墓群の一角に西谷７号墳が築造される。

中期に入っても北光寺古墳（57），西谷 15 号墳，16 号墳などが築造されるものの，古墳の数はあまり増加しない。

後期に入ると，多くの古墳が築造されるようになり，神戸川東岸に今市大念寺古墳（13），上塩冶築山古墳（27），上塩冶地蔵山古墳（31）といった首長墓が連続して築造され，西岸では，放レ山古墳（48），妙蓮寺山古墳（47），宝塚古墳（46）などが築造される。また北山山脈南側の扇状地上には，未盗掘古墳の中村１号墳が知られている。また後期以降横穴墓が盛んに造られる。神戸川西岸の神門横穴墓群（52）（約 100 基）と東岸の上塩冶横穴墓群（35）（約 200 基）などの大横穴墓群も造られた。西谷墳墓群周辺にも，軟質な岩盤に 20 穴以上の横穴墓が造墓された西谷横穴墓群が確認されている。これらの横穴墓は古墳に引き続き造られており，西谷丘陵は弥生後期から古墳終末期以降まで，長期に渡り墓域であったようである。

古代

古代には出雲平野に神門郡と出雲郡の２つの行政区画が定められた。この「郡」の役所が「郡家」である。発掘調査の成果により，神門郡家は古志本郷遺跡，出雲郡家は後谷遺跡（斐川町）周辺に比定されている。古志本郷遺跡では郡庁と考えられる大規模な掘立柱建物跡が検出された。神戸川を挟んだ対岸にある三田谷Ⅰ遺跡からも，墨書土器，「高岸神門」などの木簡，緑釉陶器などが出土し，神門郡の出先機関とみられている。一方，出雲郡に位置する青木遺跡からは多量の墨書・ヘラ描き土器のほか，国内最古級の神像，絵馬，売田券木簡などが出土している。また平野北西部の鹿蔵山遺跡(62)からは，奈良三彩，緑釉陶器，腰帯金具，墨書土器などが出土しており，官衙施設を含めた性格が考えられている。古代寺院では，『出雲国風土記』に記載される神門郡朝山郷新造院が，神門寺境内廃寺（25）に推定されているほか，平野南側の丘陵谷奥に所在する大井谷Ⅱ遺跡（34）では，遺跡を南北に縦断する大溝から仏教関連遺物が出土しており，遺跡北側に所在する般若寺周辺に関わる古代寺院の存在が考えられる。墳墓としては，火葬骨を納めた石櫃を持つ光明寺３号墓（38）や，石製骨蔵器を納めた菅沢古墓（28），朝山古墓，小坂古墳（49）が知られている。県内で確認された石製骨蔵器５例のうち，この４例が出雲平野南側丘陵に集中している。生産遺跡としては，古代の行政区画で楯縫郡にあたる宍道湖北岸で，９世紀前半代の窯跡群として出雲地方最大級の木舟窯跡群が確認されている。

第２章　過去の調査

平成 17 年（2005）夏，株式会社　丸三が店舗敷地造成工事を計画した。出雲市文化財課は同年８月 29 日付でこの工事に伴う埋蔵文化財確認調査の依頼を受け，同年９月９日に試掘調査を実施することとなった。

試掘調査では，事業予定地に３か所のトレンチを設定し，重機により徐々に掘削しながら遺構・遺物の有無を確認した。

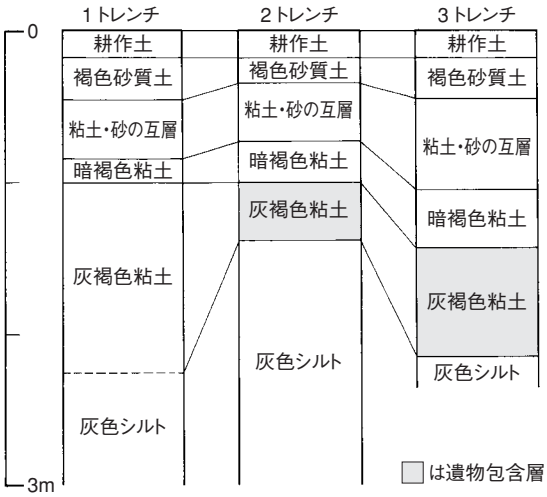
試掘調査により事業予定地の一部が埋蔵文化財包蔵地であることが確認されたため，事業者へその旨を報告し，同年 10 月３日付で「高岡Ⅱ遺跡」として島根県教育委員会へ遺跡発見の通知を提出した。その後，事業者と協議した結果，当該地における開発計画は変更・中止となり，遺跡については現状保存されることなったため，本調査は実施していない。

調査の結果，３か所のトレンチのうち，事業地東側に位置する２・３トレンチより弥生時代終末期から古墳時代初頭頃を中心とする時期の土器が多量に出土し，２トレンチからは溝状遺構・ピット状遺構が確認された。基本的な層序については，表土・洪水堆積土などの下に遺物包含層となる灰褐色粘土が堆積し，包含層下に堆積する灰色シルト層の上面が遺構面と確認されている。なお，灰褐色粘土及び灰色シルト層は，それぞれ本調査の８層及び９層と対応する。

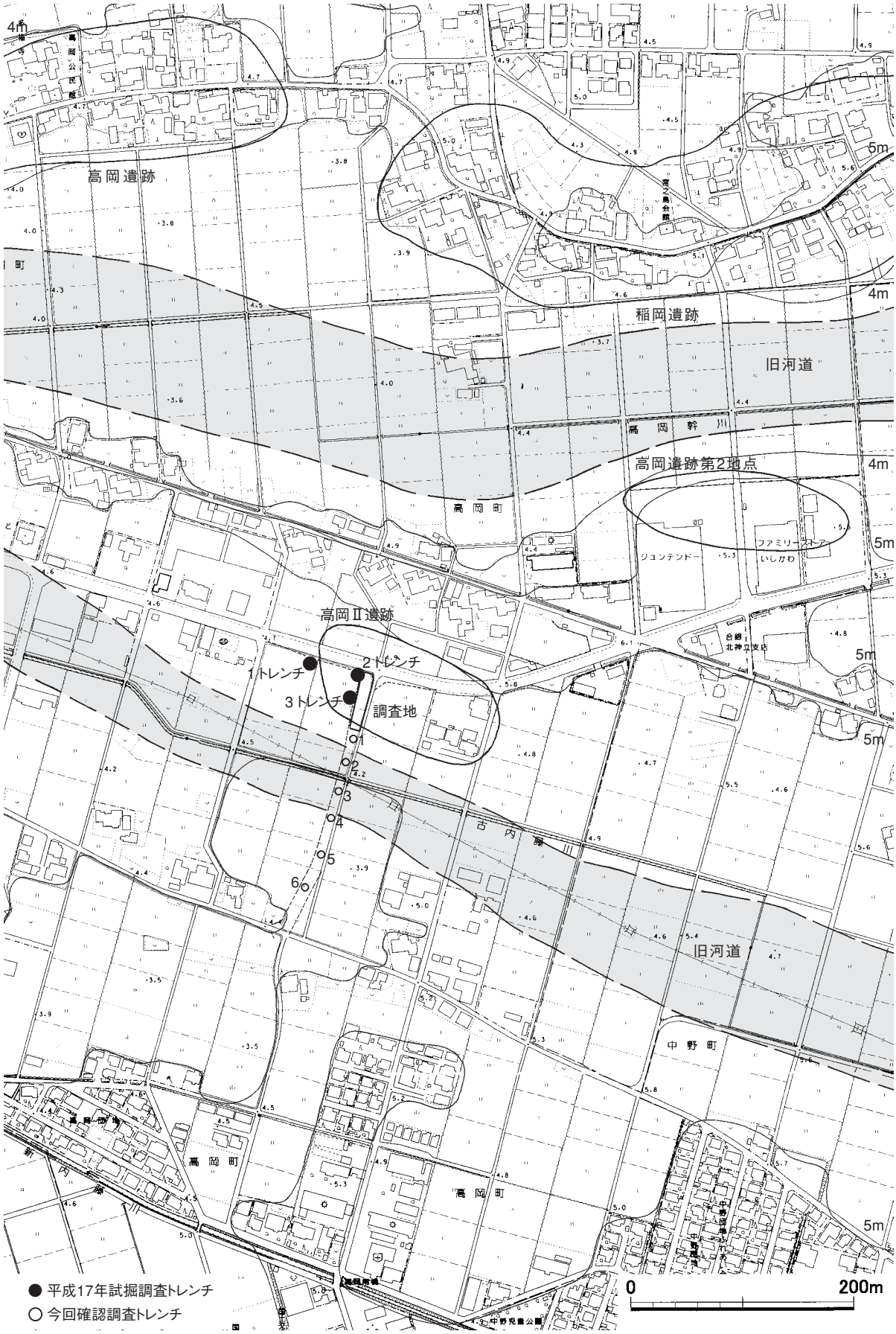
採取資料には，弥生終末期から古墳時代初頭の時期を中心として壺，甕，高坏，鼓型器台，低脚坏などがあるが，やや古い形態の資料があり，遺跡の時期が弥生中期頃まで遡る可能性が指摘されている。また基盤層の高さ，遺構の分布状況から，調査地周辺は遺跡の縁辺部にあたり，遺跡は調査地よりさらに北東方向へ広がるものと推定されている（『出雲市埋蔵文化財調査報告書』第16集，2006 年）。

参考文献

須賀照隆　2006 「高岡Ⅱ遺跡の発見」『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書　第 16 集　上塩冶築山古墳　角田遺跡　高岡Ⅱ遺跡　中村１号墳出土装飾大刀』　出雲市教育委員会



第３図　平成 17 年試掘調査　土層柱状図



第４図　高岡Ⅱ遺跡調査位置図（1：5，000）

第3章　調査に至る経緯と経過

第1節　調査に至る経緯

平成20年度，市道路建設課は市内高岡町地内に北本町谷田谷線の改良を計画し，平成21年(2009)1月15日付文書にて，市文化財課に埋蔵文化財の有無について照会をした。事業地は平成17年度の試掘調査により遺物・遺構が確認された高岡Ⅱ遺跡の範囲を含んでいた。事業地のうち，遺跡の有無が確認されていない範囲については，6か所にトレンチを設定し，2月17日に遺構・遺物の有無を確認した。

調査の結果，当年度試掘分の6か所については，遺物・遺構が確認されなかったため，市文化財課は2月20日付け文書にて，平成17年度の試掘調査で遺跡が確認されている事業地北側については発掘調査が必要な旨，市道路建設課に報告した。

協議の結果，調査は平成21年度に行うこととし，市道路建設課は平成21年7月3日付け文書にて，市文化財課に発掘調査の依頼をした。埋蔵文化財発掘の通知（文化財保護法第94条第1項）は，市道路建設課より市文化財課を経由し，島根県教育委員会教育長に提出されており（平成21年7月3日付，道建　第127号），埋蔵文化財発掘調査の通知（同法第99条第1項）については，本調査開始前の平成21年11月16日に，出雲市教育委員会教育長から県教育長に提出している（文財　第359号）。

第2節　調査の経過

発掘調査は平成21年11月19日より調査区北側から表土以下の重機掘削を開始した。

現地は平成17年度の試掘調査により土質が軟質であることが確認されていたため，調査区の壁を5分勾配として掘り進めていたが，当初見込み以上に土質が軟弱で，壁が崩落する危険が生じたため，途中から1割勾配に変更した。

重機掘削後，排水のためのサブトレンチ，土留め，釜場などを設置したが，予想以上に湧水が著しく，調査区は東西両壁に押し潰される形で，床面が隆起するほどの崩壊を繰り返した。

現地は地形が変わるほどの崩壊を起こすことから，市文化財課は根本的な解決を発掘調査支援業務受注業者である株式会社テクノシステムと協議し，松杭（直径15 cm，長さ250 cm）を打ち込むなど様々な養生を行った。しかし状況は全く改善せず，再び崩落する危険性も考えられた。

安全面・予算を考慮すると，これまでの経緯からも面的な発掘調査は不可能であった。そこで再び両者で協議した結果，①調査区中でもやや地形の高い北側部分について，松杭で養生した後，可能な限りの範囲を短期で調査する。②①で調査した範囲に真砂土を入れ，重機の作業スペースを確保し，重機により泥土を上げ遺物採取に特化する。また遺物採取後は真砂土で埋める。③機械掘削と真砂土

埋め戻しをグリッド毎に繰り返し，可能な限り遺物採取するという手順で進める方針を固めた。なお，調査区南側に残る部分（全体の約３分の１）については，試掘調査の結果から遺物量が少なく，また旧河道に近いため，さらに酷い湧水が想定されたことから，現地で県文化財課の最終判断を仰いだ上で，基本的には調査しない方針とした。

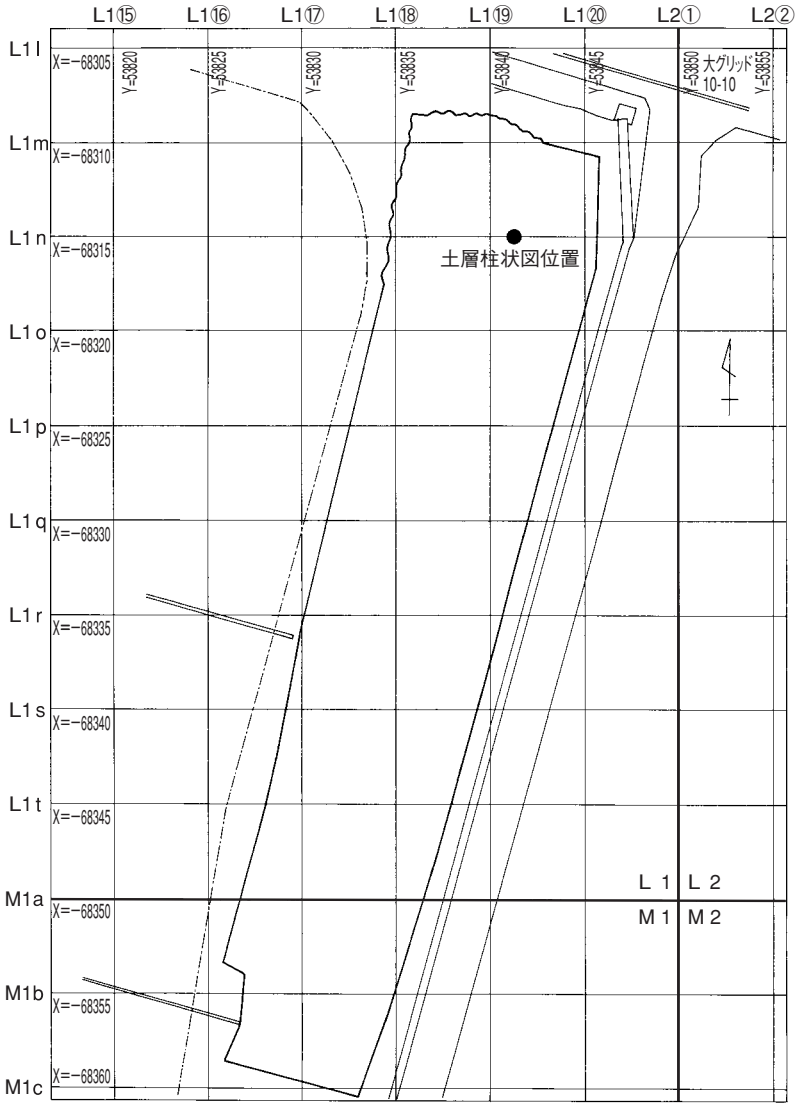
県文化財課担当者による現地確認の結果，湧水が酷く土質が軟弱であることから，面的な発掘調査を実施することは難しく，前述の方針により調査を実施し，可能であれば土層柱状図を記録することとなった。

県文化財課の指導を受け，調査はグリッド毎に包含層の機械掘削，真砂土による埋め戻しを繰り返し，掘り上げた粘土内から手作業による遺物採集を行うことを中心に実施した。なお，機械掘削中に遺構は検出されていない。

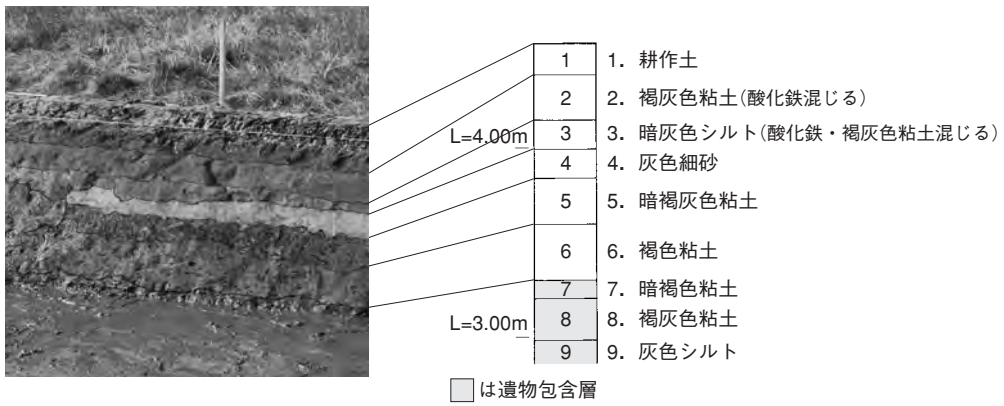
調　査　前　全　景（南から）

第４章　調査の概要

第１節　調査区の層位



第５図　調査区平面図（1：400）



第６図　調査区西壁土層堆積状況と調査区土層柱状図（1：40）

調査は度重なる崩落により困難を極めたが，土層の判断できる個所で得られた基本となる堆積状況は，１．耕作土，２．褐灰色粘土（酸化鉄混じる），３．暗灰色シルト（酸化鉄・褐灰色粘土混じる），４．灰色細砂，５．暗褐灰色粘土，６．褐色粘土，７．暗褐色粘土，８．褐灰色粘土，９．灰色シルトである。

遺物包含層である7～9層からは，7～8層で弥生前期から古墳前期末の遺物が出土しており，それぞれ古墳時代前期の遺物が中心である。戦後間もなく撮影された米軍空撮写真によれば，付近は湿地帯であったと考えられ，遺物の多くが磨滅していることから，河川によるローリングを受けているものと考えられる。9層中からは出土遺物は少ないものの，弥生前期後葉から末頃の甕が1点出土している。なお，1～6層からは遺物は出土していないが，7層上面で白磁の輪花皿が1点出土している。

第2節　出土遺物

1．弥生時代前期の土器（第7・8図1～8，図版1）

第7・8図の土器は，弥生時代前期の遺物である。

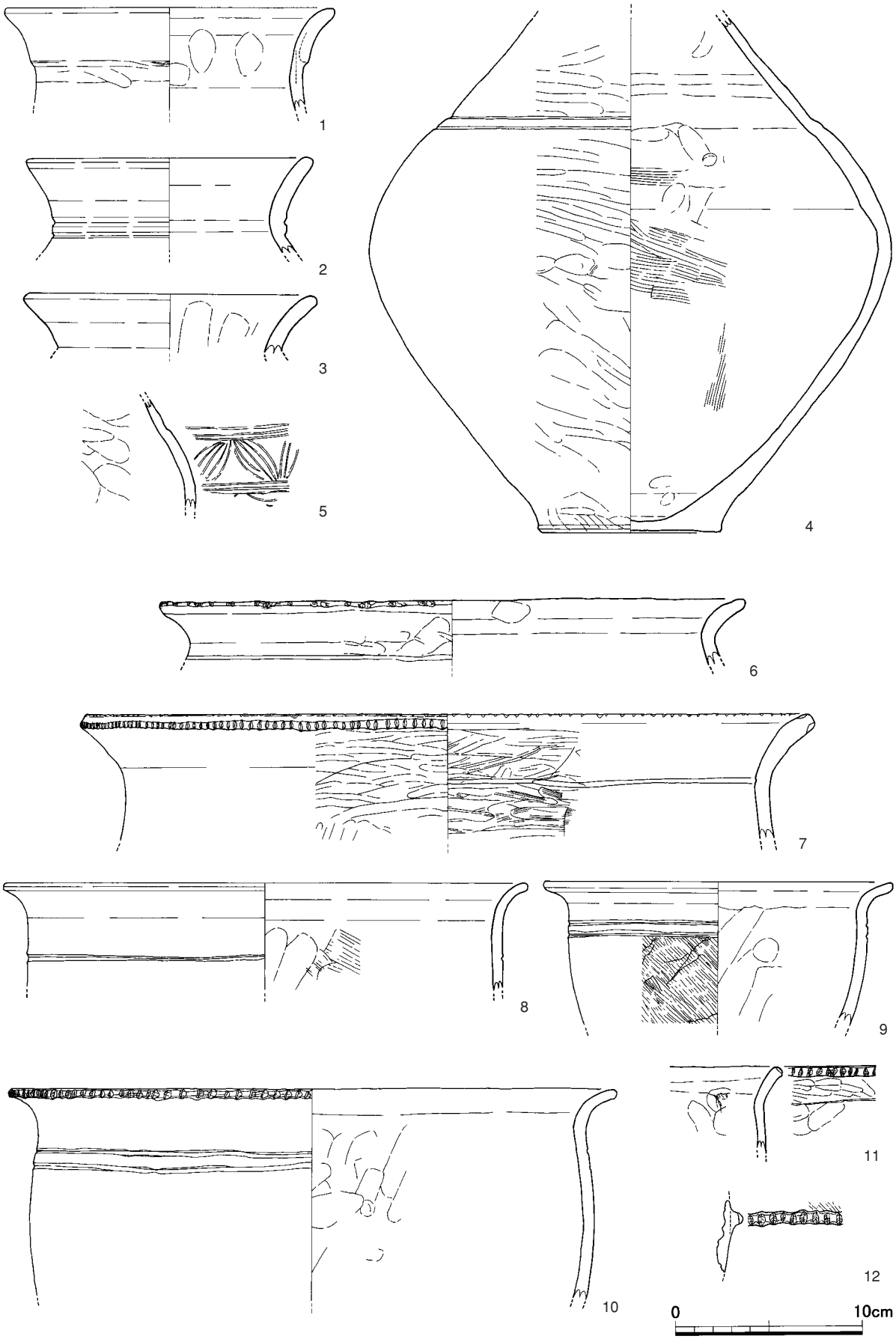
第7図 1～5 は壺である。1～3 はいずれも外反する口縁部で，端部は丸い。1 は端部に段が，2 は2条の沈線がある。4 は口縁部を欠くが，ほぼ全形が残るもの。肩部には段があり，その直下に2条の沈線文がある。胴径28.0 cm。外面はヘラミガキ調整，内面は頸部から胴部までがヘラミガキ調整，胴部にはハケ目調整を施している。頸部・胴部・底部内面にユビオサエが残る。5 は頸胴部の破片で，頸部と胴部の間には段を作り，肩部には2条と3条の沈線文で区画された中に木葉文，沈線文下側には重弧文がある。外面は胴部にヘラミガキ調整，内面にはヘラミガキ調整かナデ調整を施している。

6～12 は口縁部が強く外反する甕の口縁部である。6 は尖り気味の端部にまばらな刻目文を施している。口縁部直下に1条の沈線文がある。7 の端部は平坦面で上下に刻目文を施す。胴部は無文。内外面にヘラミガキ調整を施す。壺の可能性もある。8 は端部が丸い。口縁部の直下の外面には沈線文を1条入れている。9 は小型の甕。端部は丸い。口縁部直下には2条の沈線文がある。外面ハケ調整後，口縁部にナデ調整を施す。内面は風化が著しいが，ナデ調整を施しているものと考えられる。10 の口縁端部には刻目文が，外面には2条の沈線文が施されている。11 はゆるく外傾する口縁部。丸い端部に刻目文，頸部には1条の沈線文がある。12 は外面の突帯である。

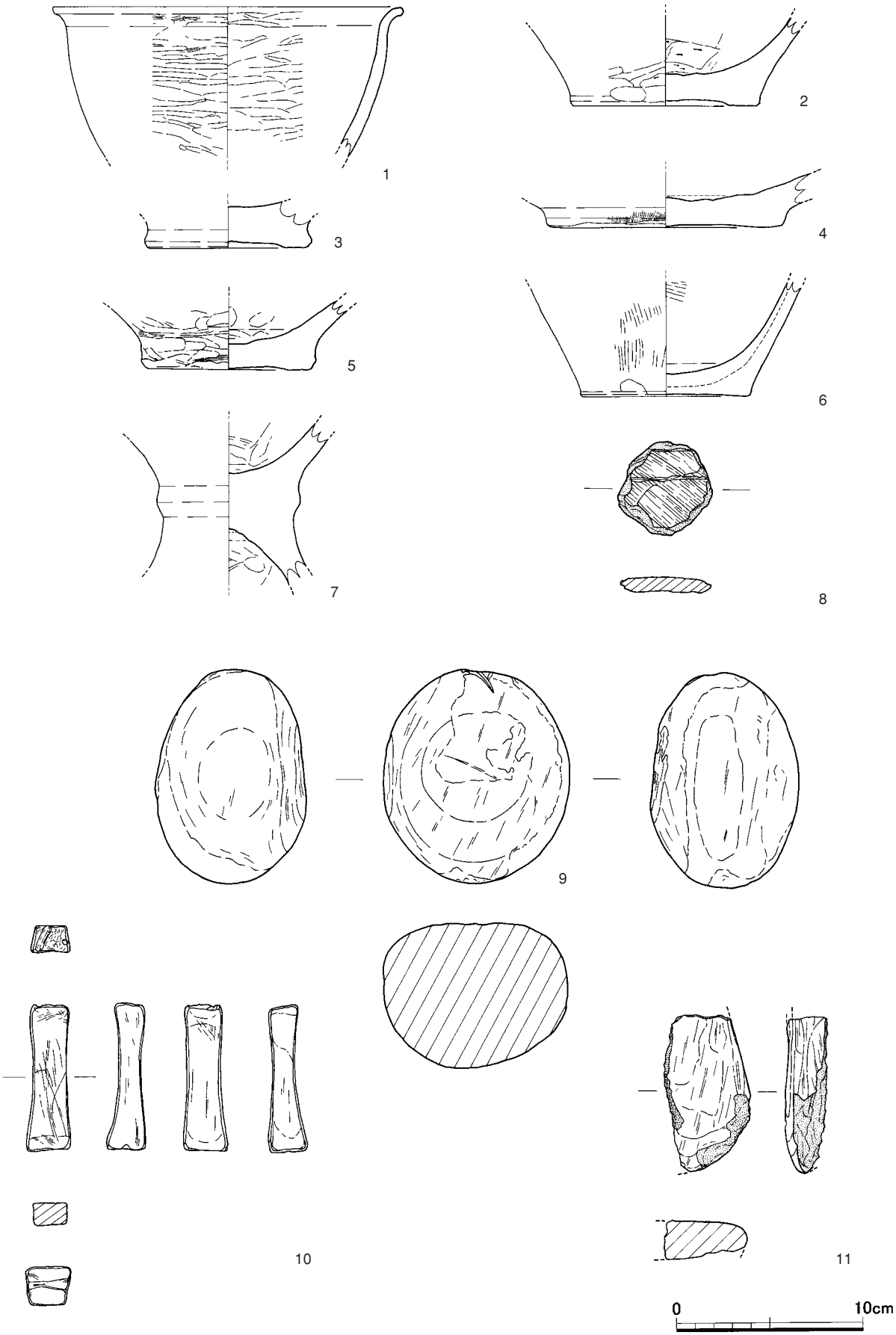
第8図1は口径18.6 cm の小型の鉢。口縁部は外反し，端部は丸い。外面にタテハケを施した後，内外面にヨコミガキ調整を施す。2～6 は壺または甕の底部である。2・3 は底面が凹んでいる。

7 は高坏。坏部と脚部境を突帯状に肥厚させている。器壁は厚く，胎土も粗い。8 は弥生土器を転用した土製円盤である。外面に1条の沈線文がある。

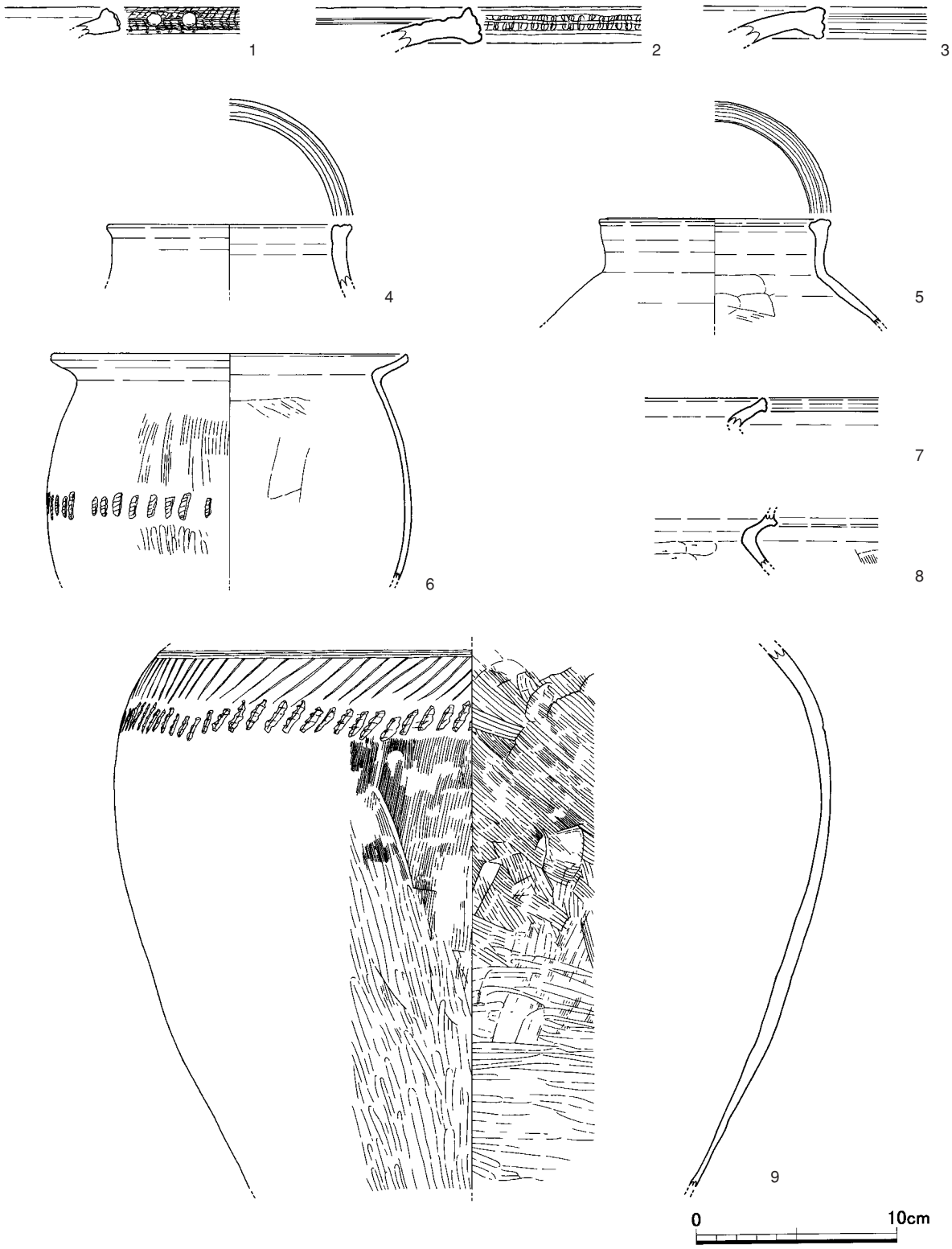
弥生時代前期の土器の多くは，弥生前期中葉から後葉（矢野2～3式）の遺物と考えられる（『矢野遺跡』出雲市の文化財報告10，2010年）。



第7図　出　土　遺　物　1　(1：3)



第8図　出　土　遺　物　2　(1：3)



第9図　出　土　遺　物　3　(1：3)

2．石製品（第8図9～11，図版2）

第8図9～11は石製品。9は円礫使用の叩石である。10は砥石。5面を砥ぎ面として使用している。木口側の砥ぎ面には，中央に溝状の砥ぎ痕を確認できる。11は石斧か。表面に使用痕が残る。

3．弥生時代中期から後期の土器（第9～11図，図版3・4）

第9・10図は弥生時代中期の壺または甕である。

第9図1～3は広口壺の口縁部である。1の端部には，3条の凹線文と羽状の刻目文が入り，その上に円形浮文がある。2の端面には3条の凹線文を引いた後，刻目文を施す。口縁部内側にも2条の凹線文が施されている。3は口縁端部を下方にやや大きく拡張し，端面には3条の凹線文がある。

4・5は直口壺。口縁端部に2～3条の凹線文が施され，内外面ともにナデ調整を施す。5は肩部内側にヘラケズリ調整を施す。

6～9は甕である。6は，くの字状に屈折して広がる口縁部と倒卵形の胴部からなる甕。口縁部が内湾気味に立ち上がる。胴部外面には列点文がある。口縁部にナデ調整，胴部外面にハケ目調整，内面にヘラケズリ調整を施す。外面の一部に煤が付着している。7の端部には凹線文状の凹みがある。9は甕の胴部。肩部には上から順に，3条以上の櫛描き文，ヘラ描き斜線文，列点文が施されている。外面には肩部にナデ調整，胴部上半にハケ目調整，下半にタテミガキ調整を施す。内面には胴部上半にハケ目調整，下半にヘラケズリ調整が施されている。

第10図1～3は倒卵形の胴部と，くの字形にひらく口縁部をもつ甕。1は口縁端部に平坦面を作り，両端部を拡張させて，そこに4条の凹線文と刻目文を施す。肩部外面には刺突文が施されている。底部は平底である。胴部はタタキを施した後，上半は内外面ともにハケ目調整，下半は外面にタテミガキ調整，内面にヘラケズリ調整を施す。口径26.1 cm，高さ43.8 cm，底径8.4 cmである。2・3も同形態の甕だが，胴部外面には刺突文はない。

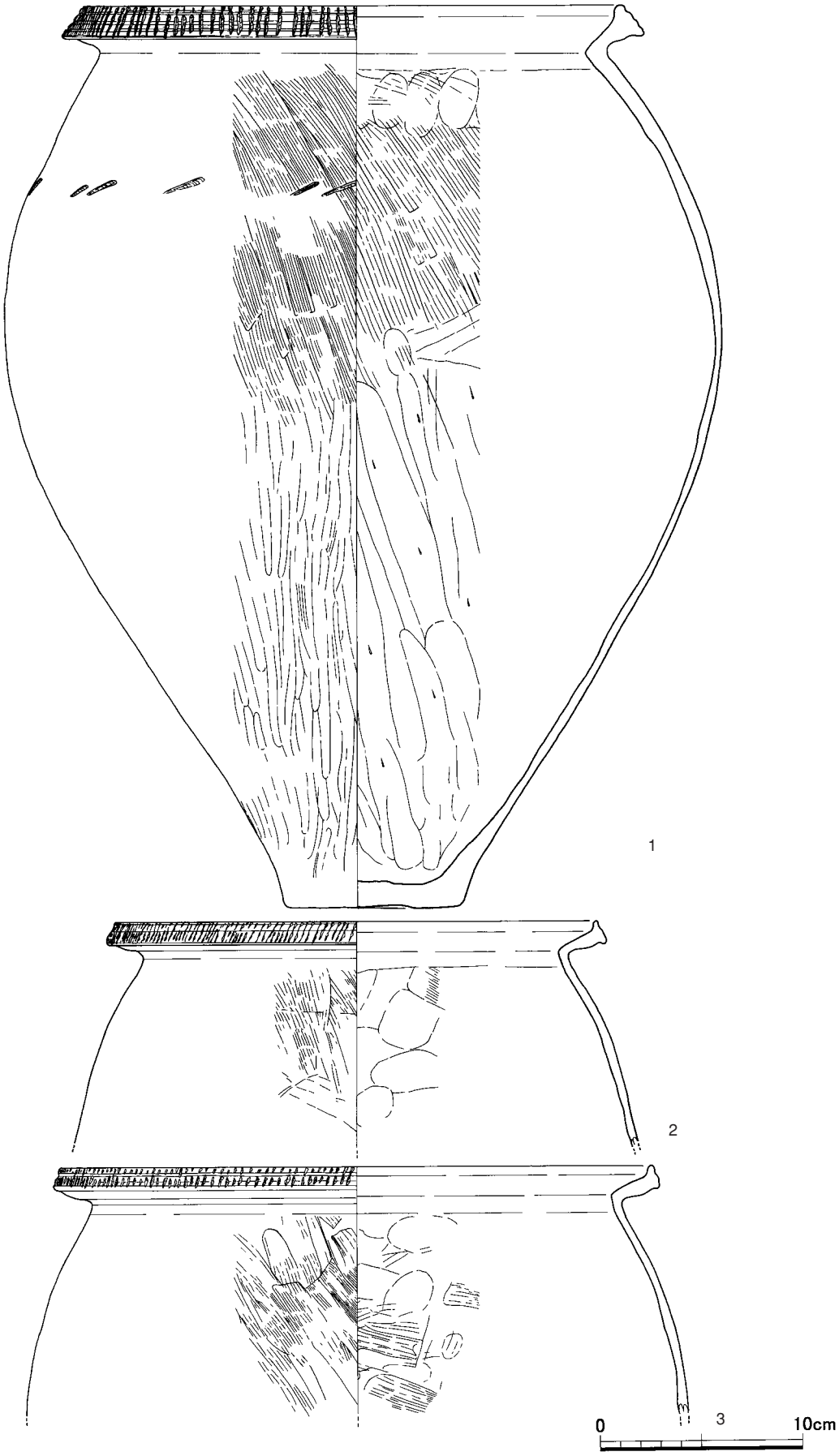
第11図は弥生時代中期から後期の遺物である。1は倒卵形の胴部をもつ甕。胴部は外面にタテミガキ調整，内面にヘラケズリ調整，頸部にナデ調整。外面に煤が付着する。2は壺の肩部から胴部。外面に刺突文。内外面にハケ目調整。3は胴部下半で，外面にタテミガキ調整，内面にヘラケズリ調整。2・3はともに外面に赤彩が残り，同一個体の可能性がある。4は壺か甕の底部。

5は鉢。屈折して広がる口縁部の端部は凹線状の凹みが1条認められる。口縁部内外面にナデ調整，胴部内外面にタテミガキ調整を施している。

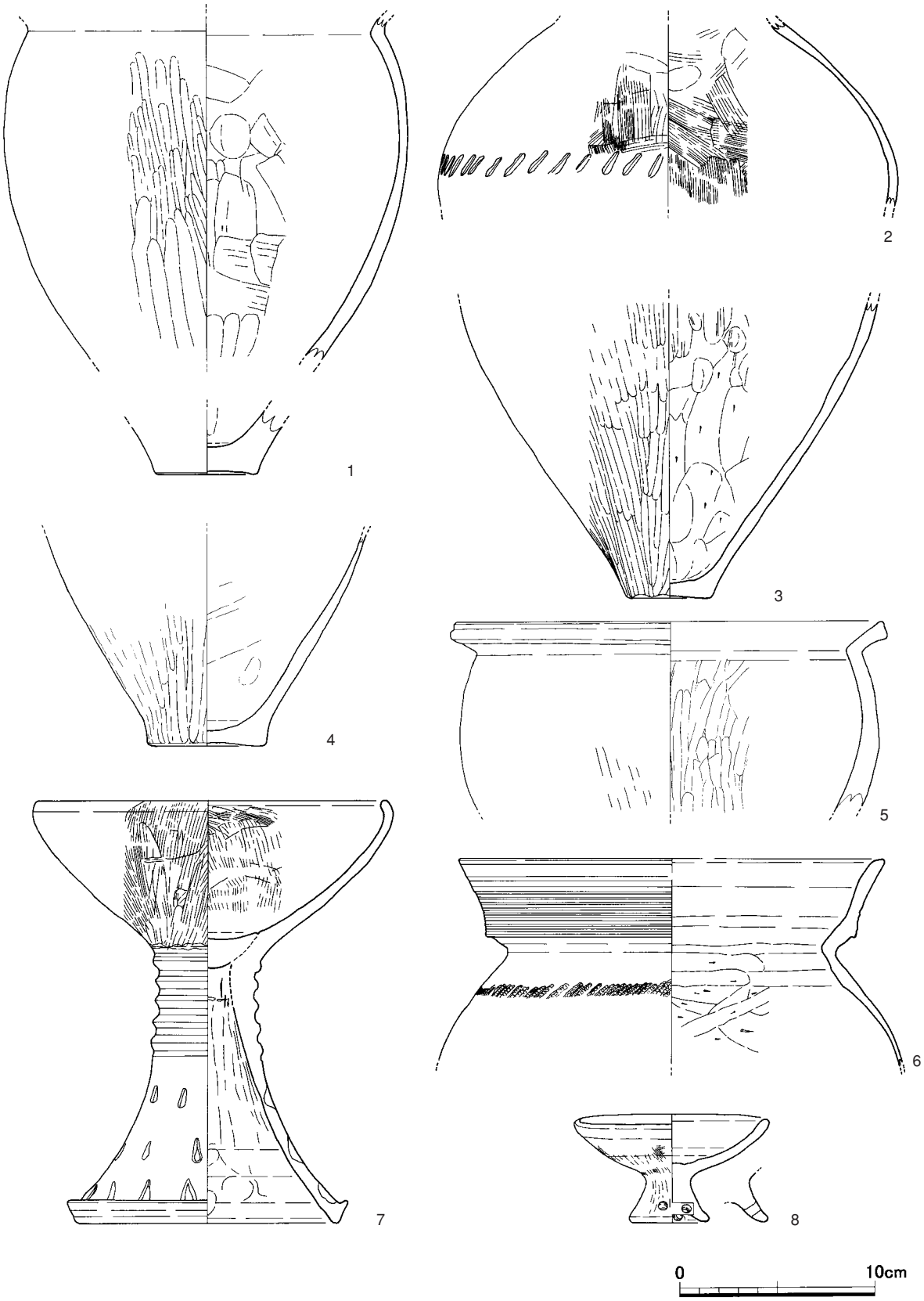
6は複合口縁をもつ後期の壺か甕。口縁部はやや外反し，端部は尖り気味である。口縁部外面には擬凹線が施され，肩部外面には列点文が施されている。胴部内面はヘラケズリ調整。

7は高坏。坏部は内湾気味に立ち上がり，口縁部で強く内湾する。端部は丸い。脚部は円錐形で上端に5条の突帯がめぐる。外反する裾部には三角透かし状の刺突文を三段施している。端部は上端部を拡張させて平坦面を作る。坏底部には円盤を充填している。坏部内外面はハケ目調整を施した後，ヘラミガキ調整を施す。脚部は風化が著しいが，内面にヘラケズリ調整を施している。

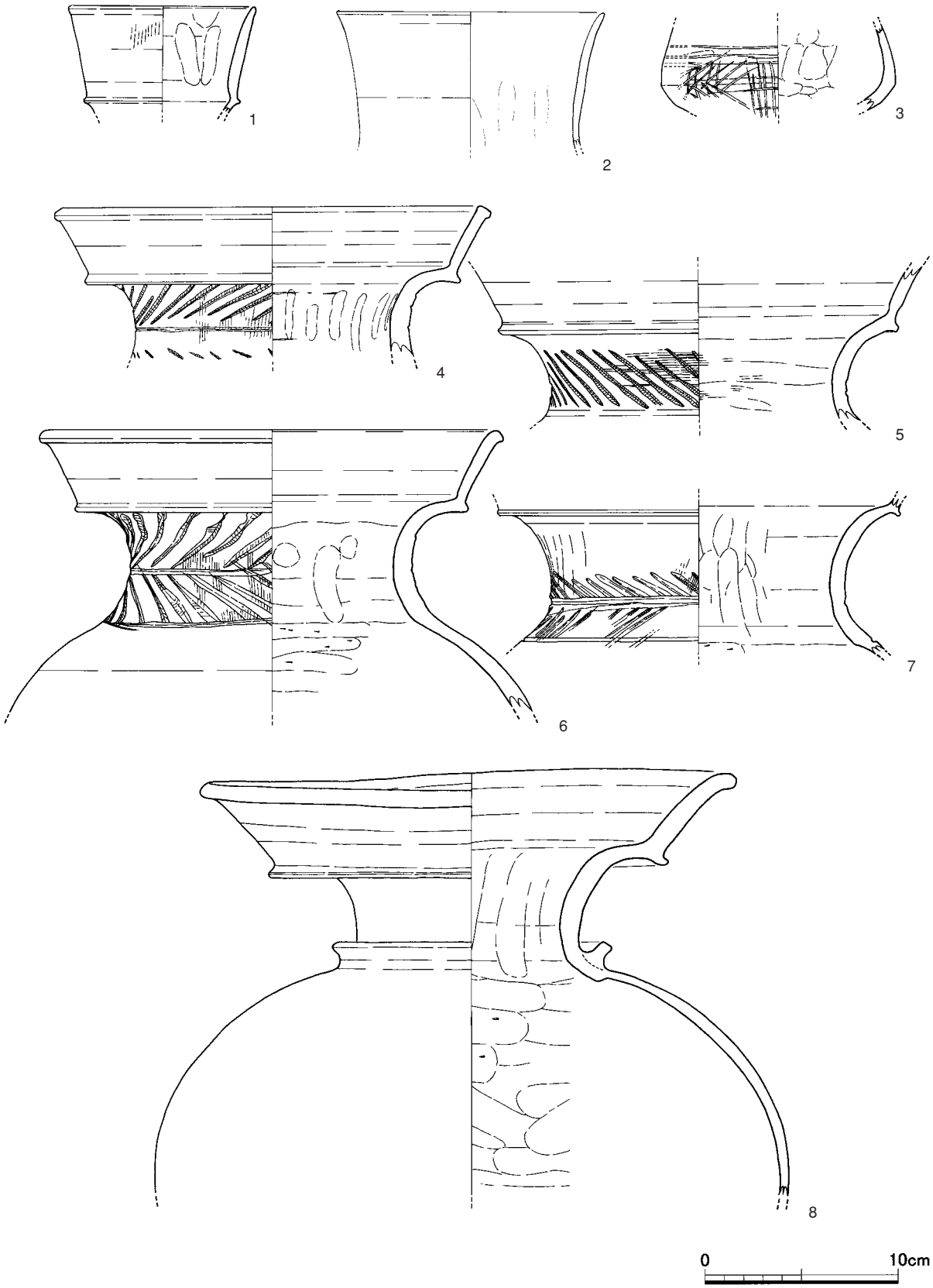
8は低脚坏で，浅い坏部はわずかに内湾する。脚部は端部で外反気味に広がる。端部には2方向に



第10図　出　土　遺　物　4　(1：3)



第11図　出　土　遺　物　5　(1：3)



第12図　出　土　遺　物　6　(1：3)

2ヶ一対の穿孔がある。坏部は外面にタテハケを施した後，タテミガキ調整を施し，内面にヘラミガキ調整を施す。口縁部はナデ調整している。内面に赤彩残る。蓋の可能性もある。

弥生時代中期の遺物が多く，中でも松本Ⅳ－1から2の遺物が比較的多く出土している。

4．弥生時代終末期から古墳時代前期の土器（第12～19図，図版3～7）

第12・13図は弥生時代終末期から古墳時代前期の壺である。

第12図1・2は直口壺の口縁部である。1は複合口縁の上部が直線的に伸び，端部は尖り気味に仕上げている。2は外反気味の直口壺の口縁部。

3は壺の胴部で，1条の沈線の下に斜めのヘラ描き文とヘラ描き羽状文を入れる。

4・6・7は頸部に有軸羽状文を持つタイプのもので，刺突による施文である。5も同様であろう。4・6は口縁部が外方に直線的にひらき，端部には平坦面がある。6の口縁部にナデ調整を施し，内面胴部にはヘラケズリ調整を施す。口径23.0 cmである。5・7も同じような口縁部であろう。8は頸部下端に断面方形状の貼り付け突帯をもつ広口壺である。口縁部は複合口縁で外方に大きくひらく。端部は丸い。口縁下端部は強く屈曲し明確な突帯がめぐる。口縁部にナデ調整を施す。胴部外面は風化のため調整不明であるが，内面にはヘラケズリ調整を施している。口径26.5 cm，胴径32.3 cmである。

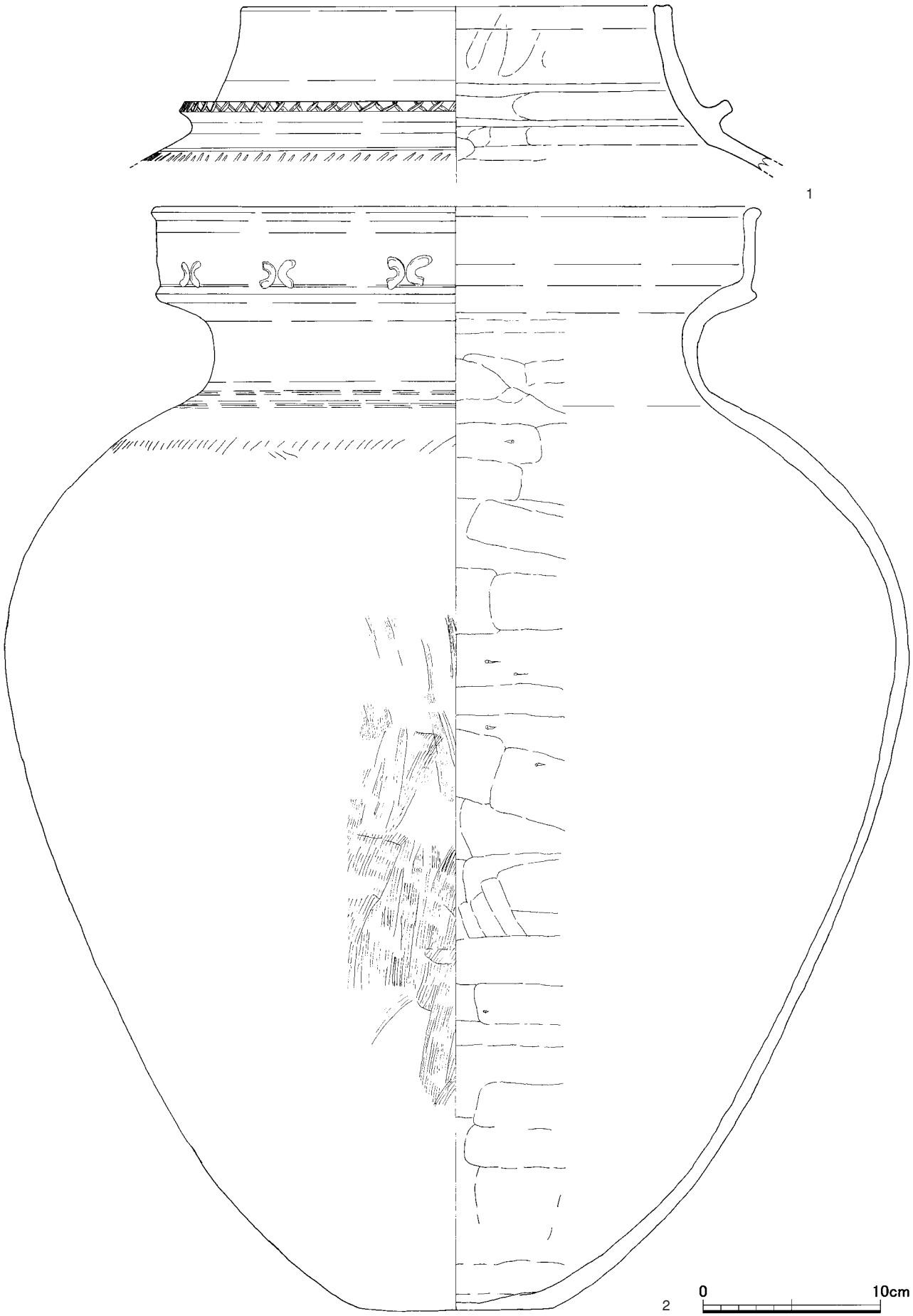
第13図1は大型の短頸壺。口縁部は内傾する。端部には平坦面がある。肩部には断面方形状の貼り付け突帯があり，そこに斜格子文を施している。肩部には1条の凹線状の凹みの下に列点文がある。口縁部にはナデ調整を施し，胴部内側にはヘラケズリ調整を施す。口径23.6 cmである。2はほぼ完形の大型壺。口縁部は直立気味の複合口縁である。外面にC字状の半裁竹管文を背中合わせに施文している。倒卵形の胴部は最大径がかなり高い位置にある。底部は丸底気味の平底である。肩に刺突文がめぐる。口縁部にナデ調整，胴部は外面にハケ目調整，内面にヘラケズリ調整を施す。口縁部は33.0 cm，高さ61.0 cm，底径10.7 cmである。

第14～17図は古墳時代初頭から前期の複合口縁の壺または甕である。

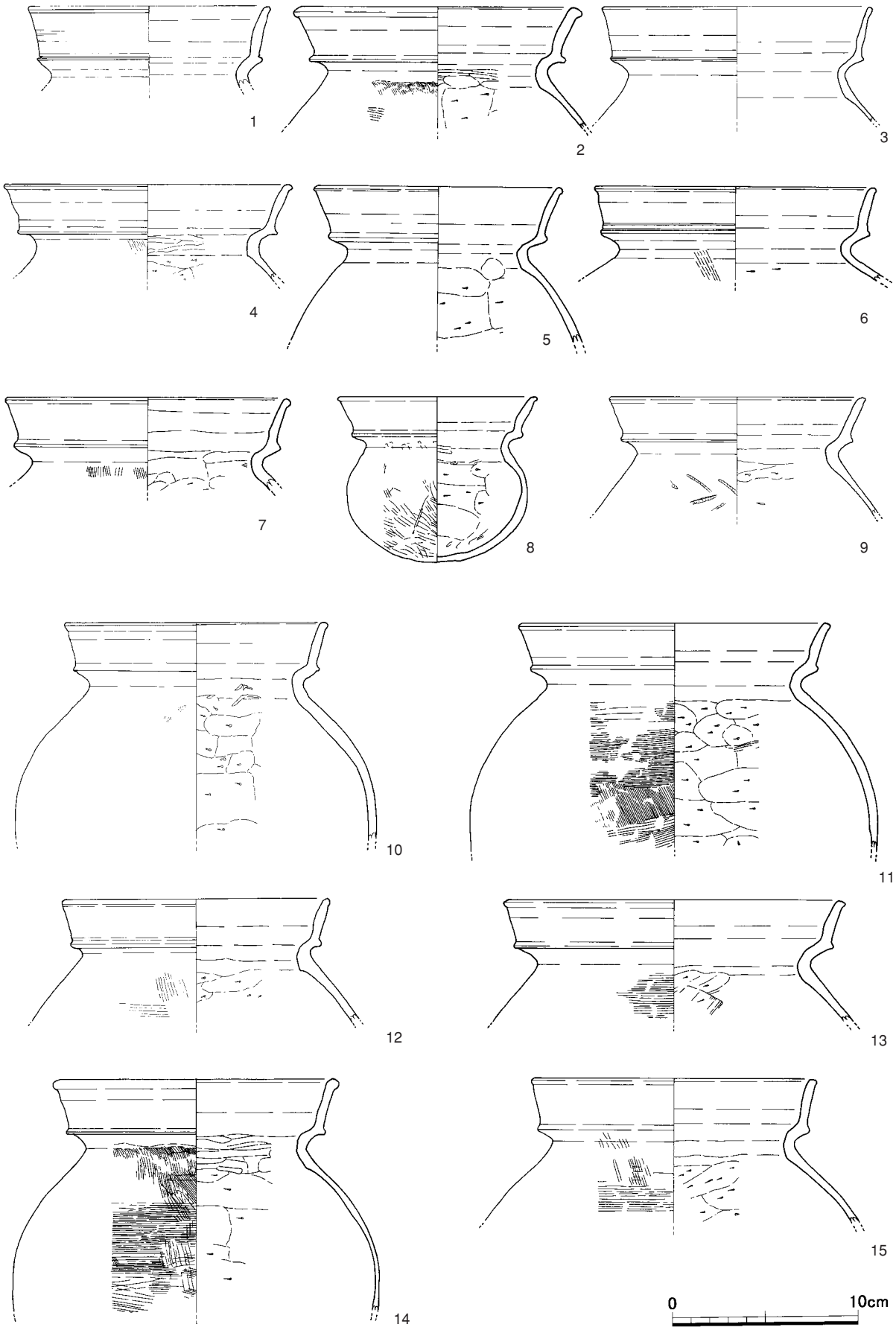
第14図は口縁端部を丸くおさめるもの（3・6・9・10・15），外側へわずかに突出させるもの（1・5・11）と，口縁端部に平坦面を作るもの（2・4・7・13・14）がある。何れも口縁部にはナデ調整が施されている。頸部から胴部外面には2・4・6・7・10～15にハケ目が残る。一方胴部内面には2～7・9～15にヘラケズリ調整が確認できる。2・4・7・14の頸部内側にヨコミガキ調整が施されている。6・7には赤彩が施されている。口径は1・5・9が13 cm前後，2・3・6・7・10・12・14・15が14～14.5 cm前後，4・11・13が15 cm以上で，それぞれ15.2 cm・16.0 cm・17.5 cmである。

8は小型の壺で，口縁端部を外側に折り曲げている。口縁部にナデ調整，胴部外面にハケ目調整，内面にヘラケズリ調整を施している。口径10.4 cm，高さ8.8 cmである。

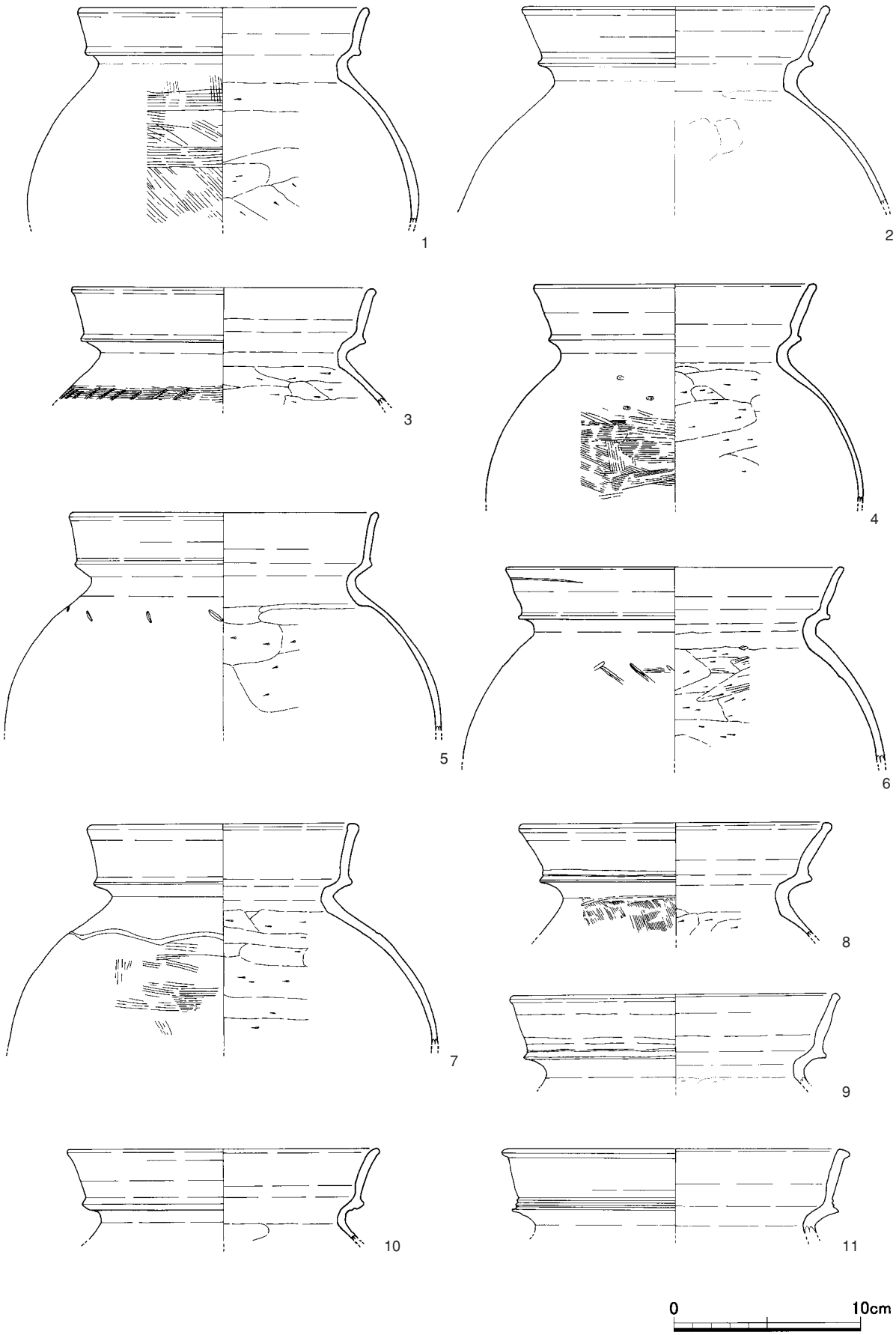
第15図は口縁端部を外側に折り曲げたもの（10），丸くおさめるもの（1・2・3・9），外側へわずかに突出させるもの（5・6）と，口縁端部に平坦面を作るもの（11），内側に折れ曲がるもの（4・7・8）がある。何れも口縁部にはナデ調整が施されている。頸部または肩部の外面から胴部外面には1・



第13図　出　土　遺　物　7　(1：3)



第14図　出　土　遺　物　8　(1：3)



第15図　出　土　遺　物　9　(1：3)

3・4・6～8にハケ目が残る。一方胴部内面には1～10にヘラケズリ調整が確認できる。口径は7が13.6 cm，1・4が15 cm前後，2・3・5・8・10が16 cm前後，6・9・11が17 cm以上で，それぞれ17.7 cm・17.1 cm・17.4 cmである。

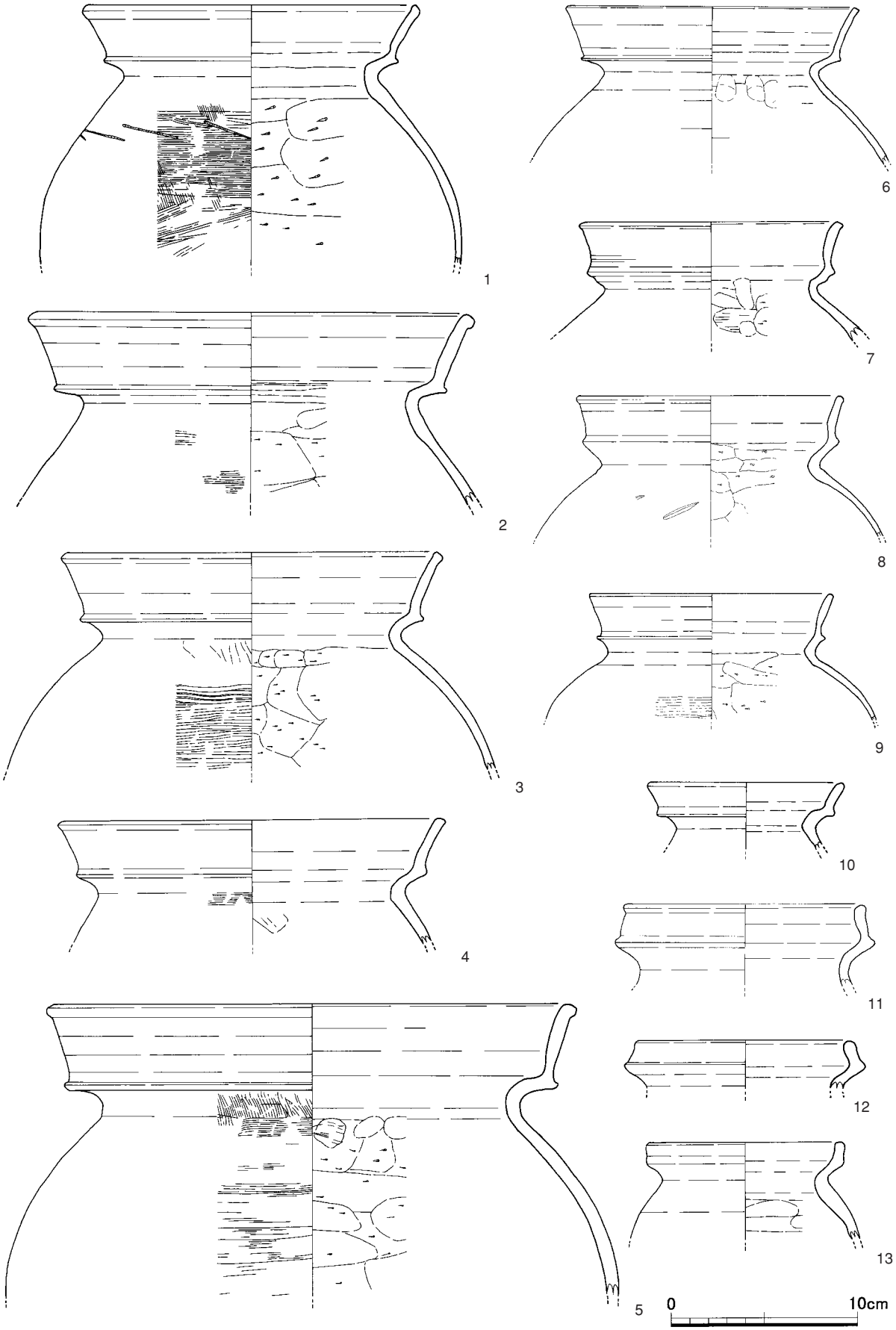
第16図は口縁部を丸くおさめるもの（8），外側へわずかに突出させるもの（4・6・9），口縁端部に平坦面を作るもの（2・5・7），内側に折れ曲がるもの（1・3）がある。何れも口縁部にナデ調整，頸部または肩部から胴部には，1～5・9にハケ目が残る。一方胴部内面には1～5・7～9にヘラケズリ調整が確認できる。7の外面に赤彩が残る。口径は7～9が13～14 cm前後，6が15.1 cm，1が17.4 cm，2～4が20～23 cm前後，5は27.1 cmである。

また壺では口縁部下端部から内側に立ち上がるもの（11・12），外側に立ち上がるもの（10），直立的に立ち上がるもの（13）が確認できる。何れも口縁部にナデ調整を施している。13は胴部内面にヘラケズリ調整を施している。口径は10・13が10 cm前後，11が12.5 cm，12が11.0 cmである。

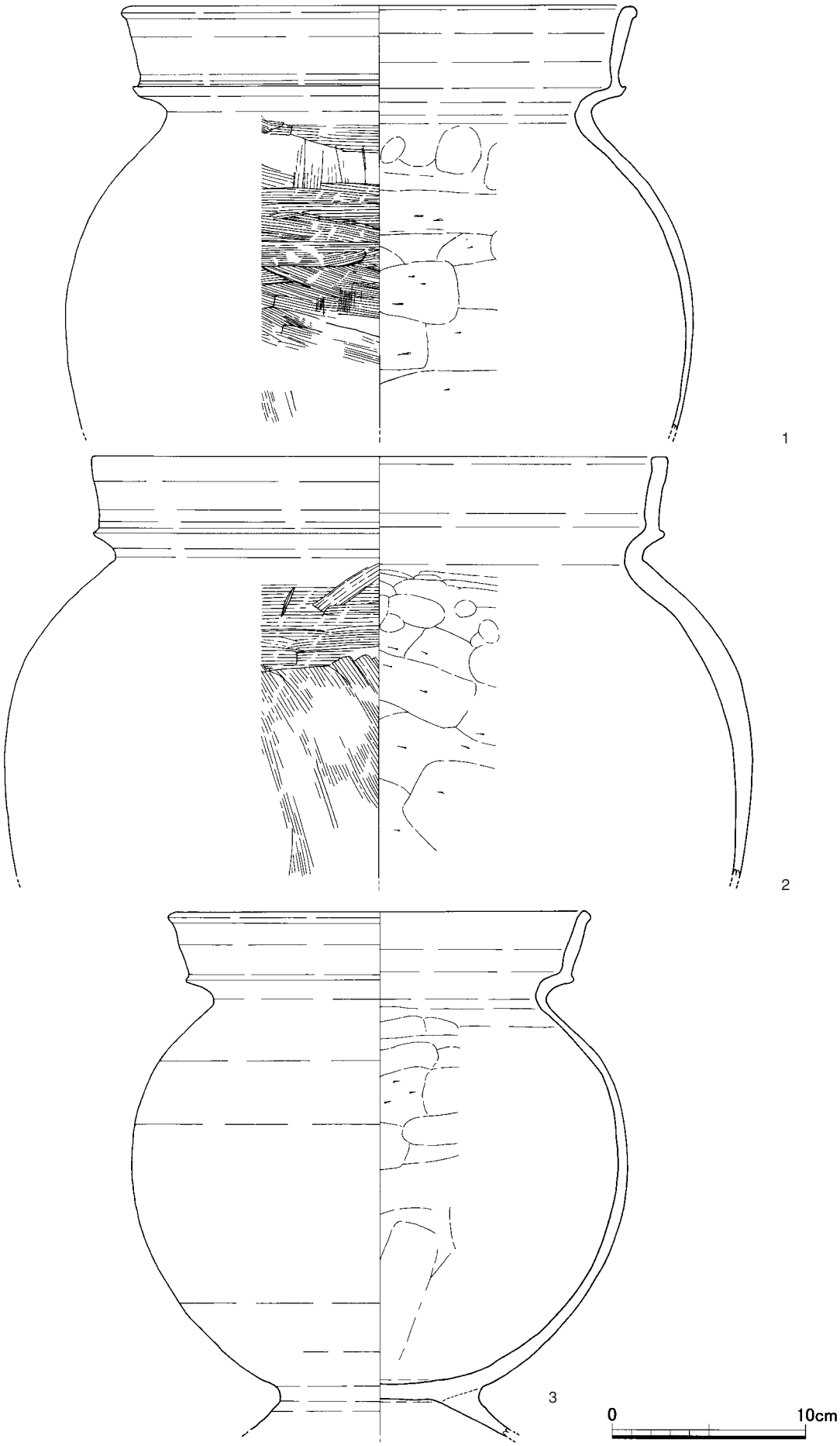
第17図1・2は大型の甕である。1は直立気味の口縁部をもつ。口縁端部は外側に肥厚されている。口縁部にナデ調整，胴部外面にハケ目調整，内面にヘラケズリ調整を施す。口径25.5 cm，胴径32.1 cmである。2も端部に平坦面を作っている。口縁部にナデ調整，外面は胴部にタテハケ目調整，肩部にヨコハケ目調整，内面にヘラケズリ調整を施す。口径29.2 cm，胴径38.2 cmである。3は台付甕。口縁部はやや外傾する。端部は平坦である。底部の脚台は外方に直線的に広がる。口縁部にナデ調整，胴部は外面の風化のため調整不明であるが，内面にはヘラケズリ調整が施されている。口径20.8 cm，胴径25.4 cmである。

第18図は高坏・小型器台・低脚坏である。

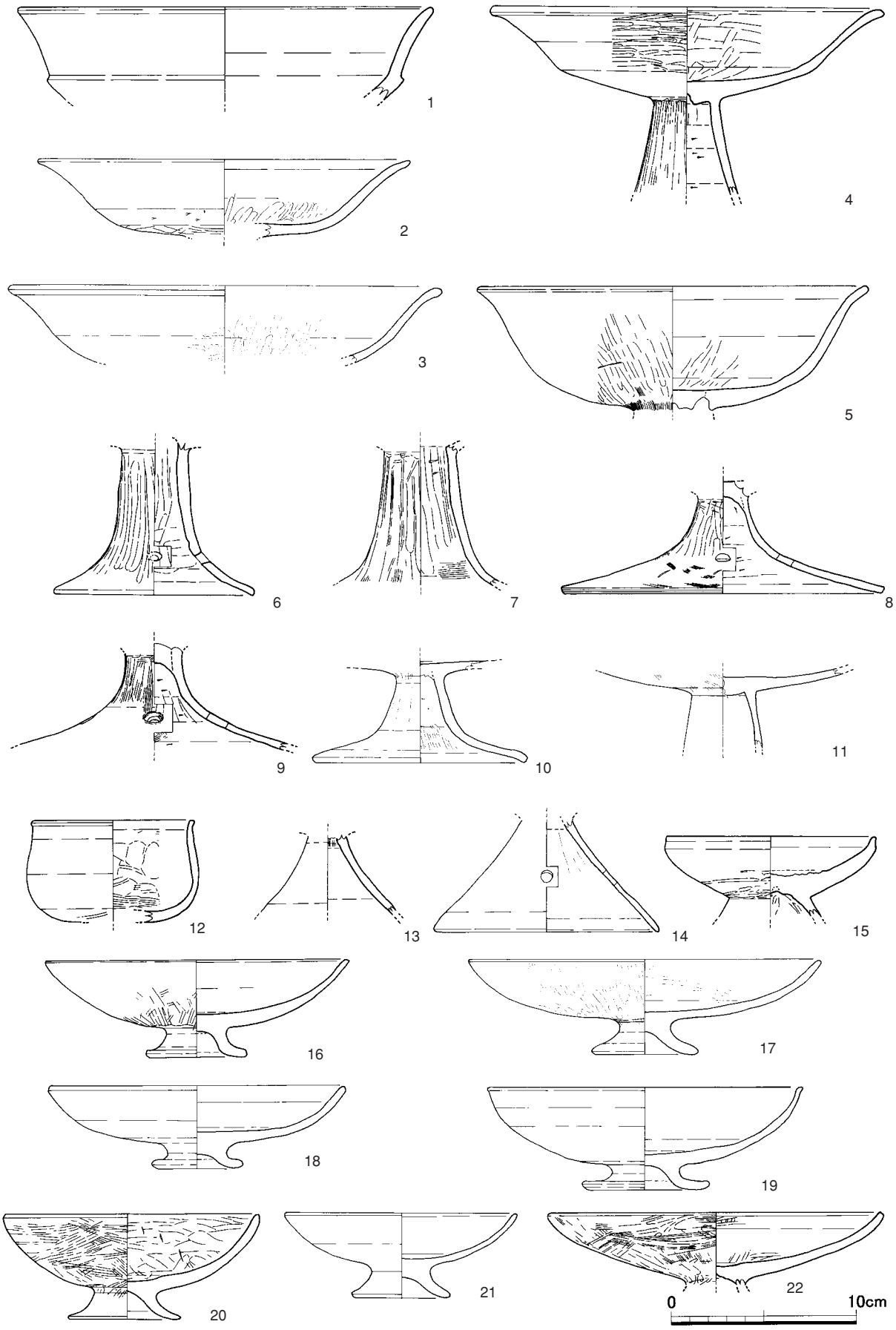
1～12は高坏。1は屈曲して広がる坏部である。口縁端部は丸く仕上げられている。2～4はゆるく屈曲して広がる坏部をもつ高坏である。2は坏部の上下で粘土の色を変えている。4には中空の脚柱部が残っている。坏底部には円盤を充填している。坏部は内外面ともにヘラミガキ調整を施す。脚部は外面にタテハケ後，タテミガキ調整を施し，内面は脚柱部にヘラケズリ調整を施し，裾部にナデ調整を施している。口径20.8 cmである。5は深い椀状の坏部の高坏。口縁端部はわずかに外反する。坏底部には円盤を充填している。坏部内外面とも放射状のミガキ調整。口径20.6 cm。6～10は脚部である。6は太くて長い中空の脚柱部と小さめの径の裾部からなる。3方に円形透かしがあったものと考えられる。7もこれと同形であろう。脚柱部は外面がタテミガキ，内面はヘラケズリ調整である。8は短い中空の脚柱部と大きな裾部からなる脚部。裾部には4個の円孔があったと考えられる。9も同じ形である。坏底部には円盤が充填されていたものと考えられる。8は外面脚柱部にタテミガキ，裾部にハケ目調整，内面には脚柱部にヘラケズリ調整，裾部にナデ調整を施している。9は脚柱部にハケ目調整の後，ヘラミガキ調整を施し，内面にヘラケズリ調整を施している。10は短い脚柱部と脚部である。裾部は内湾気味で，端部に平坦面を作っている。坏底部には円盤を充填している。11は坏部から脚柱部の破片。脚柱部は太く，6・7に似る。坏底部には円盤が充填されている。内外面に赤彩が残る。12は口径8.5 cmの深い椀状の坏部である。口縁部は内傾しながら立ち上がり，端部が外反する。



第16図　出　土　遺　物　10　(1：3)



第17図　出　土　遺　物　11　(1：3)



第18図　出　土　遺　物　12　(1：3)

13～15 は小型器台である。13・14 は円錐形の脚部である。14 には円孔が 1 か所確認できる。風化が著しいが，外面にナデ調整，内面にヘラケズリ調整を施しているものと考えられる。底径 11.9 cm である。15 は浅い皿状の坏部である。口縁部が内湾しながら立ち上がり，端部はナデて尖り気味にしている。内外面ともにナデ調整を施している。

16～22 は低脚坏である。16～19・22 は口径 15.7～18.8 cm の浅い皿状の坏部に小さい脚部がつく。16 は口縁部が内湾しながら立ち上がり，外方に直線的に伸びる。端部は平坦気味に仕上げている。坏部外面にハケ目調整が残っている。17・18 は口縁部が内湾しながら立ち上がり，外方に直線的に伸びる。端部は尖り気味に仕上げている。脚部は 17 が外反しながら広がり，外方に直線的に伸びる。端部は尖り気味に仕上げている。坏部外面には上からハケ目調整，タテミガキ調整が残っている。18 は外反しながら広がり，外方に水平に伸びる。端部は尖り気味に仕上げている。19 は口縁部が内湾しながら立ち上がりやや外傾する。端部を尖り気味にしている。脚部は外方に直線的に伸びた後，屈曲して水平に伸びる。端部は尖り気味にしている。22 は口縁部が内湾気味に立ち上がり，端部を平坦気味にして内側端部を拡張させ尖らせている。坏部には円盤が充填されている。20・21 は口径 13.5・12.4 cm のやや小型の低脚坏である。20 はやや深めの坏部をもつ。坏部は外面にハケ目調整，内面にヘラミガキ調整を施し，脚部にはナデ調整を施す。21 は内外面ともにナデ調整を施している。22 は他のものより坏部が浅い。内外面にハケ目調整が残っている。

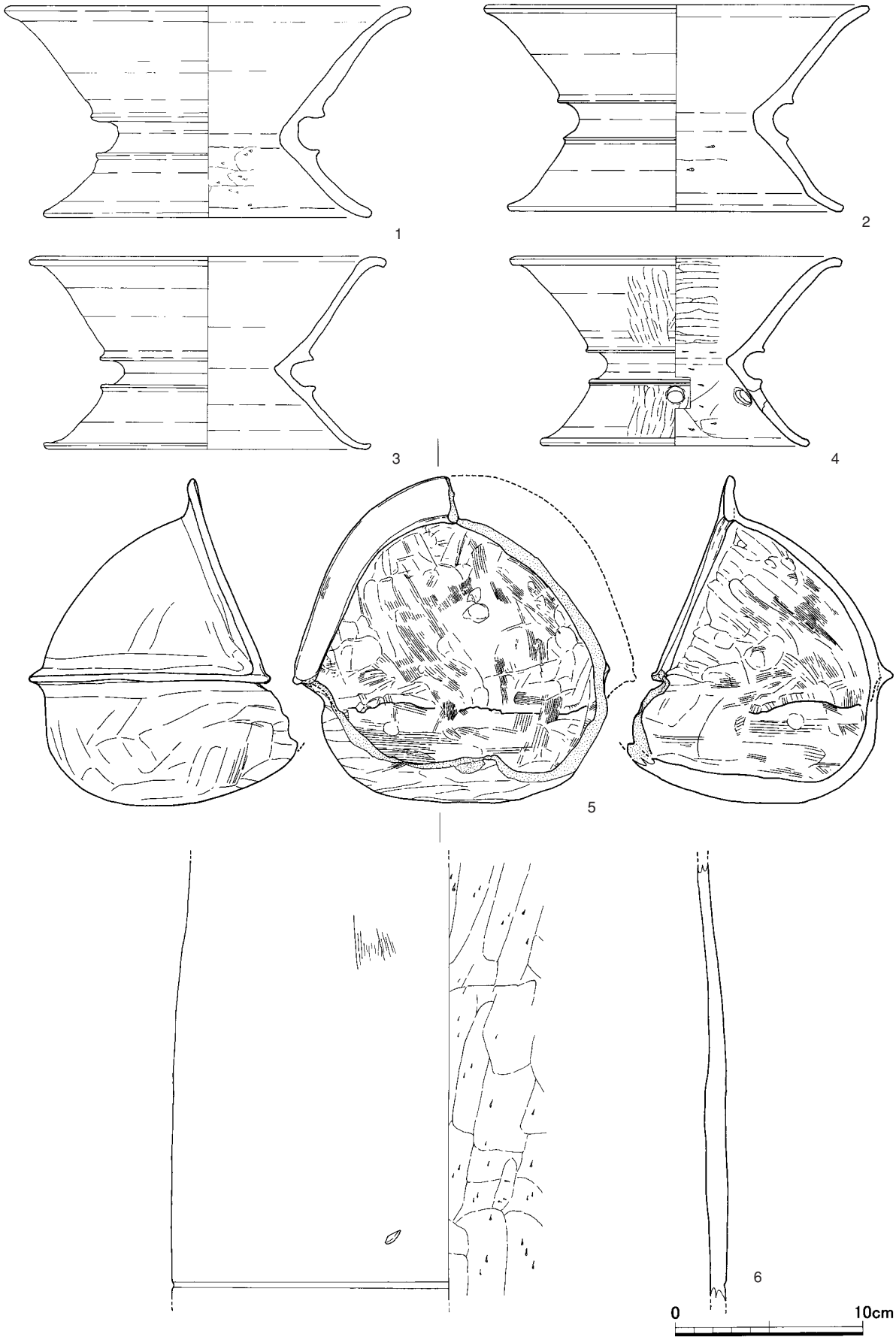
第 19 図 1～4 は鼓形器台である。1～3 は口径 20 cm 前後，脚台径 17 cm 前後，高さ 11 cm 前後のもの。1・2 は器受部と脚台部ともに，端部はゆるく外反するが，3 はやや強く外反する。また，3 は筒部内面に平坦面をもたない。4 は口径 16.7 cm，脚台径 13.7 cm，高さ 10.0 cm でやや小ぶりである。脚台部には円形の透かし孔を 3 方にあけている。器受部と脚台部の外面はタテミガキ，器受部内面はヨコミガキ調整，脚台部内面はヘラケズリ調整である。

5 は手焙形土器で，鉢状の器に覆部を接合している。鉢部と覆部の接合は，鉢部口縁端部に内側から覆部を連続的に接合する直行口縁のタイプのもので，接合箇所外面に突帯を貼り付けている。内面及び断面には接合痕が残る。一方，覆部端部には帯状の面を上 L 字状に貼り付け，突帯と接合させている。風化が著しいが，外面には覆部と鉢部にハケ目の痕跡が残る。一方，内面には覆部にハケ目調整，圧痕が施され，鉢部は器壁にハケ目調整を施した後，底部にヘラケズリ調整を施す。内面に煤は付着していない。島根県内では出雲市の古志本郷遺跡に続く 2 例目の出土である。

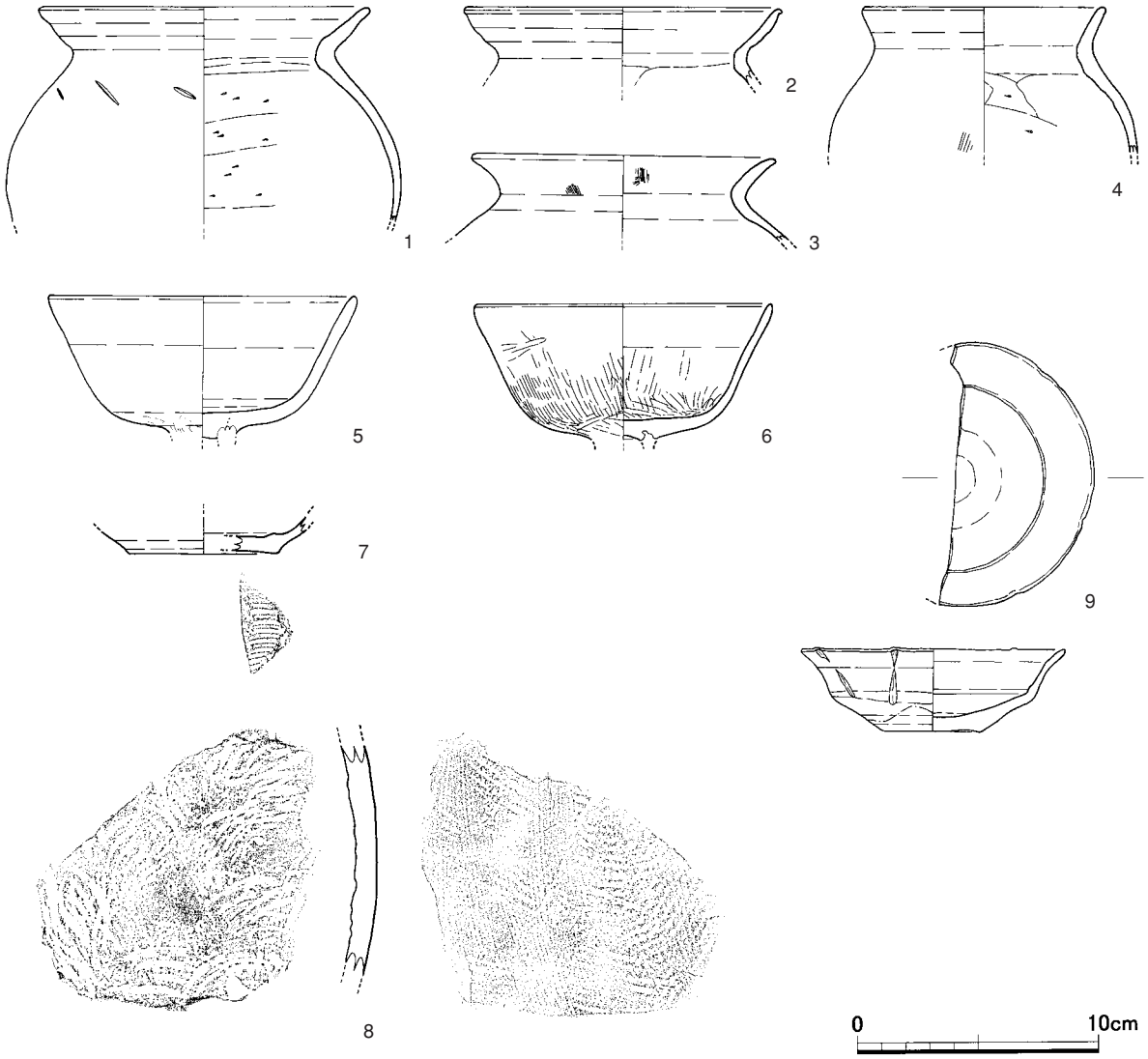
6 は筒形をした甑形土器の胴部。外面にハケ目調整，内面にヘラケズリ調整が施されている。

出土遺物のうち古墳前期前葉から後葉（小谷 2 から 3 式）の土器が最も多く確認されており，この時期がこの遺跡の

器台（第 19 図 1）出土状況



第19図　出　土　遺　物　13　(1：3)



第20図　出　土　遺　物　14　(1：3)

最盛期と考えられる。

5．その他の遺物（第20図，図版7）

第20図は古墳時代前期以降の遺物である。

1～6は古墳時代の土師器である。1～3は，口縁部が外方に直線的に広がる甕。口縁端部は尖り気味である。口径は13 cm前後。1の肩部外面には，まばらな刺突文がある。口縁部にナデ調整を施し，胴部は外面の風化のため調整不明であるが，内面にはヘラケズリ調整が施されている。2の口縁部はやや内湾する。3は口縁部が外反気味に立ち上がり，端部は尖り気味に仕上げている。4は小型の甕で，口縁部はゆるく開く。口縁部にナデ調整を施し，胴部は外面にハケ目調整，内面にはヘラケズリ調整が施されている。口径は9.8 cmである。

5・6は高坏の杯部である。直線的に開く杯部である。坏底部に円盤が充填されている。口径12.6・12.1 cmである。単純口縁の土器は遺跡の最盛期に近いものが出土している一方，高坏は最盛期の頃から，ややピークを過ぎた時期のものが出土している。

7・8は須恵器である。7は坏の底部。外面に回転糸切痕を残す。8は横瓶の胴部片である。外面に擬格子叩き目とカキ目が，内面には同心円状の当て具痕がある。須恵器の出土量は極めて少量であり，周辺から単発的に持ち込まれた遺物である可能性が考えられる。

9は白磁輪花皿である。底部から直線的に開き，途中で屈折して外反する。底部は平高台で露胎とし，断面には漆接の漆が残る。10世紀後半から12世紀前半のものである。

第5章　まとめ

今回の調査では遺構は確認されなかったものの，弥生時代前期から古墳時代前期まで土器や石製品などが多量に出土した。7～9層の遺物包含層のうち7・8層からは古墳時代前期の土師器を中心として，様々な時期の土器が多量に出土している。9層からは弥生前期の土器が1点出土したにとどまる。米軍空撮写真から付近には河川があったことが推定されるが，遺物の磨滅が著しいことからも，これらは河川などの影響を受けていると考えるべきであろう。

平成17年度の試掘結果によれば，弥生時代終末から古墳時代初頭を中心とし，遺跡の開始時期は弥生時代中期頃まで遡るとされ，また基盤層の高さ，遺構の分布状況から遺跡は調査地よりさらに北方・東方へ広がるものと考えられることから，現地は遺跡の縁辺部にあたるとされている。

今回の調査では，古墳時代前期の土師器が突出して多く，弥生時代前期の土器も一定量出土していることから，遺跡の開始時期は弥生時代前期に遡り，遺跡の盛期も従来考えられていた時期より新しく，古墳時代前期頃と考えられる。しかし前期末には衰退の兆しが見え始め，古墳中期には完全に衰退していたようである。

一方，遺跡の広がりについては，平成17年度の試掘調査結果と今回の調査を実施する前に行った確認調査の結果から，調査地は遺跡の南西縁辺部と考えられる。また現地は調査区外北側と東側にさらに標高が上がることから，平成17年度の試掘調査で指摘されているとおり，遺跡は北方・東方に広がっているものと考えられる。調査区外北側には斐伊川が形成した旧自然堤防が東西に続いており，遺跡の広がりから，旧自然堤防上に集落遺跡などを考える必要があろう。

古墳時代前期の出土遺物には，手焙形土器や高台付甕といった特殊な土器が含まれている。

このうち手焙形土器は，本来出雲の土器ではなく，近畿地方，とくに現在の大阪府を中心とする地域で多く出土している。中国地方では，近畿地方に隣接する岡山県が群を抜いて出土例が多いが，島根県内では出雲市の古志本郷遺跡で1点確認されているのみで，高岡Ⅱ遺跡出土のものは2例目の出土となる。

手焙形土器は全国的には住居跡からの出土例が多く，他地方の土器あるいは非在地系土器が出土する拠点的集落での発見例が多いと指摘されている。拠点的集落と考えられている古志本郷遺跡も同様の傾向を示している。

しかしながら，高岡Ⅱ遺跡は非在地系土器の発見例がなく，遺物の出土量も多くないことから，他地域との交流の拠点となる集落とは様相を異にしている。むしろ拠点的な集落と関係する小集落を考えるべきであろう。今回の調査地は遺跡の縁辺部と考えられるため，遺跡中心部の様相は不明である。今後，中心部の様相が解明されていけば，高岡Ⅱ遺跡の性格がさらに明らかになるものと考えられる。

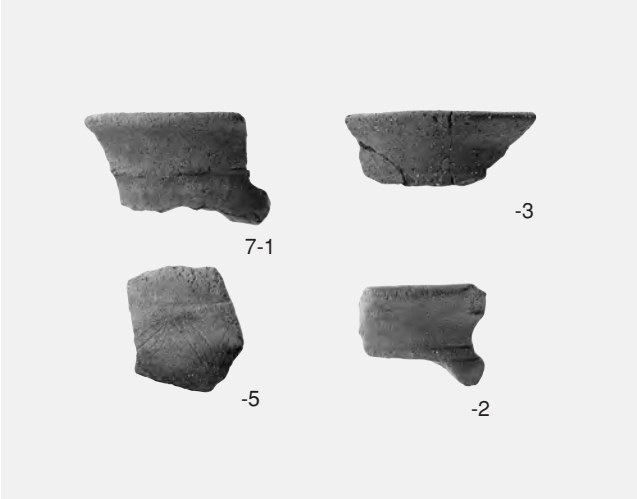
参考文献

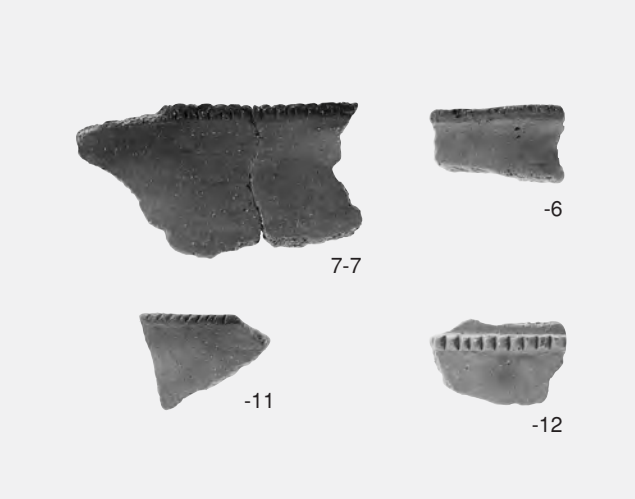
高橋一夫　1998 『手焙形土器の研究』　六一書房

高岡Ⅱ遺跡出土遺物観察表

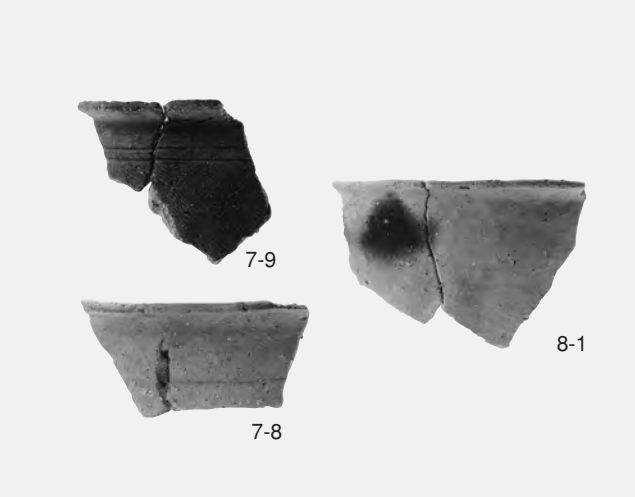
挿図番号	層　位	出　土　地　点	挿図番号	層　位	出　土　地　点
7－1	暗褐色粘土	Ｌ１ｐ⑱	14-14	褐灰色粘土	Ｌ１ｇ⑱，Ｌ１ｇ⑲
7－2	褐灰色粘土	Ｌ１ｎ⑲	14-15		排土中
7－3	褐灰色粘土	Ｌ１ｎ⑲，崩落土	15-1		排土中
7－4	褐灰色粘土	Ｌ１ｎ⑲	15-2		北側トレンチ，西側トレンチ，排土中
7－5	褐灰色粘土	Ｌ１ｎ⑲	15-3		西側トレンチ
7－6	褐灰色粘土	Ｌ１ｎ⑲	15-4		東側トレンチ
7－7	灰色シルト	Ｌ１ｎ⑲	15-5		排土中
7－8	褐灰色粘土	Ｌ１ｎ⑲	15-6		排土中
7－9	褐灰色粘土	Ｌ１ｎ⑲	15-7		東側トレンチ
7－10		Ｌ１ｑ⑱	15-8		排土中
7－11	褐灰色粘土	Ｌ１ｎ⑲	15-9		Ｌ１ｇ⑱，西壁崩落土
7－12	褐灰色粘土	Ｌ１ｎ⑲	15-10		排土中
8－1		Ｌ１ｑ⑱	15-11		Ｌ１ｑ⑱，西壁崩落土
8－2		Ｌ１ｑ⑱	16-1		西壁崩落土，西側トレンチ
8－3	褐灰色粘土	Ｌ１ｎ⑲	16-2		Ｌ１ｑ⑱，西側トレンチ
8－4		Ｌ１ｑ⑱	16-3		西壁崩落土
8－5		排土中	16-4		排土中
8－6	褐灰色粘土	Ｌ１ｎ⑲	16-5		Ｌ１ｑ⑱，排土中
8－7	暗褐色粘土	Ｌ１ｐ⑱	16-6		西壁崩落土
8－8	褐灰色粘土	Ｌ１ｎ⑲	16-7		西壁崩落土
8－9	暗褐色粘土	Ｌ１ｍ⑲	16-8		西壁崩落土
8－10		西側崩落土，西側トレンチ	16-9		東側トレンチ，排土中
8－11	暗褐色粘土	Ｌ１ｎ⑲	16-10		排土中
9－1		Ｌ１ｑ⑱	16-11	暗褐色粘土	Ｌ１ｎ⑲
9－2		排土中	16-12		Ｌ１ｑ⑱
9－3		東側トレンチ	16-13		東側トレンチ
9－4		Ｌ１ｑ⑱	17-1		西壁崩落土，排土中
9－5		Ｌ１ｑ⑱	17-2	暗褐色粘土	Ｌ１ｍ⑱，北側トレンチ
9－6		Ｌ１ｑ⑱	17-3		Ｌ１ｑ⑱，西側崩落土,西側トレンチ,排土中
9－7	褐灰色粘土	Ｌ１ｎ⑲	18-1		Ｌ１ｑ⑱
9－8	褐灰色粘土	Ｌ１ｎ⑲	18-2		Ｌ１ｇ⑱
9－9		Ｌ１ｑ⑱	18-3		Ｌ１ｇ⑱
10-1		Ｌ１ｑ⑱	18-4		西壁崩落土，排土中
10-2		Ｌ１ｑ⑱，排土中	18-5		Ｌ１ｑ⑱，西壁崩落土,西側トレンチ,排土中
10-3			18-6		トレンチ中
11-1	暗褐色粘土	Ｌ１ｐ⑱，Ｌ１ｑ⑱	18-7		西側崩落土
11-2		Ｌ１ｑ⑱	18-8	褐灰色粘土	Ｌ１ｍ⑲
11-3		Ｌ１ｑ⑱	18-9		Ｌ１ｑ⑱，西壁崩落土
11-4	暗褐色粘土	Ｌ１ｑ⑱	18-10		Ｌ１ｑ⑱
11-5	暗褐色粘土	Ｌ１ｐ⑱，Ｌ１ｑ⑱	18-11		排土中
11-6	暗褐色粘土	Ｌ１ｐ⑱	18-12		排土中
11-7		Ｌ１ｑ⑱	18-13		Ｌ１ｑ⑱
11-8		Ｌ１ｇ⑱	18-14	暗褐色粘土	Ｌ１ｏ⑲
12-1		西壁崩落土	18-15		排土中
12-2		崩落土	18-16		東側トレンチ
12-3	褐灰色粘土	Ｌ１ｎ⑲	18-17		排土中
12-4		排土中	18-18		東側トレンチ
12-5		西側トレンチ	18-19		東側トレンチ
12-6		西壁崩落土，排土中	18-20		西壁崩落土，排土中
12-7		北側トレンチ	18-21	暗褐色粘土	Ｌ１ｍ⑲
12-8		西壁崩落土　西側崩落土ほか	18-22		Ｌ１ｑ⑱，排土中
13-1		西側トレンチ	19-1		Ｌ１ｍ⑲
13-2		Ｌ１ｑ⑱，西壁崩落土，排土中ほか	19-2		西側トレンチ
14-1	褐灰色粘土	Ｌ１ｎ⑲	19-3		Ｌ１ｑ⑱，西壁崩落土,排土中
14-2		Ｌ１ｑ⑱，西壁崩落土	19-4		西壁崩落土，西側トレンチ
14-3		排土中	19-5		西側トレンチ，排土中
14-4		西側トレンチ	19-6		Ｌ１ｑ⑱
14-5		排土中	20-1	暗褐色粘土	Ｌ１ｑ⑱
14-6		西壁崩落土	20-2		西壁崩落土
14-7		西側トレンチ	20-3		西側トレンチ
14-8		Ｌ１ｑ⑱，西側トレンチ，排土中	20-4		排土中
14-9		Ｌ１ｇ⑱，Ｌ１ｑ⑱	20-5		西側トレンチ
14-10		Ｌ１ｑ⑱	20-6		排土中
14-11		Ｌ１ｑ⑱，西側トレンチ	20-7	褐灰色粘土	Ｌ１ｎ⑲
14-12		Ｌ１ｑ⑱	20-8		西側トレンチ，中央トレンチ，排土中
14-13		排土中，崩落土	20-9	褐色粘土	Ｌ１ｎ⑲

図　　版

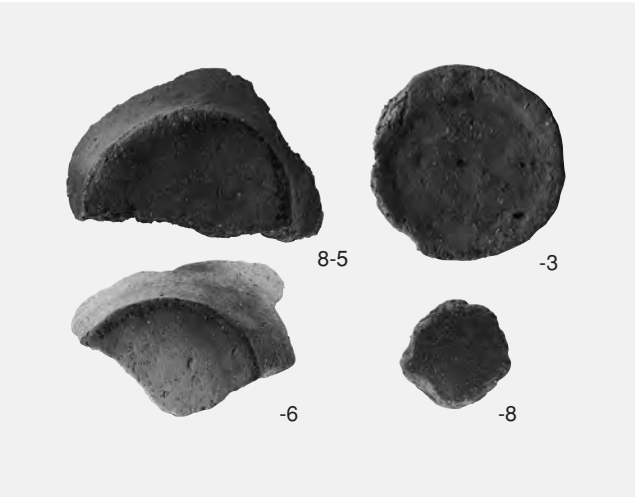

7-1
-3
-5
-2


7-7
-6
-11
-12

7-10


7-9
8-1
7-8

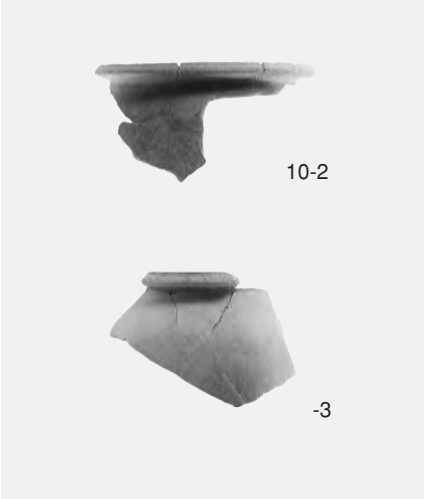
8-2
-4


8-5
-3
-6
-8

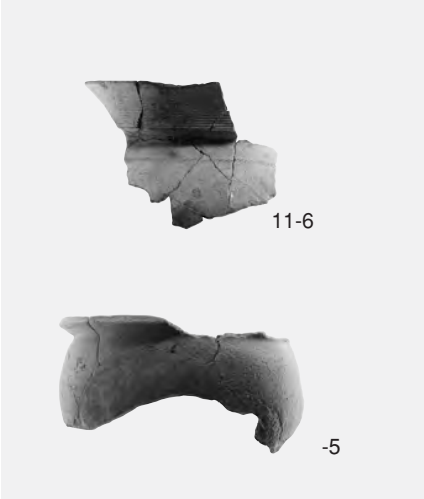
7-4

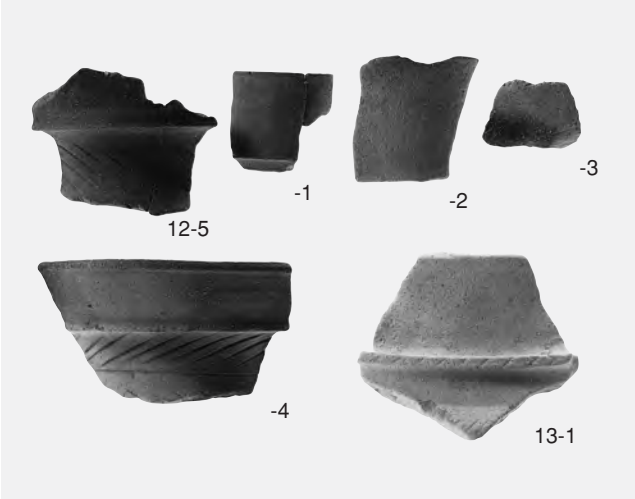
8-7

図版 2　石製品・弥生時代中期出土遺物

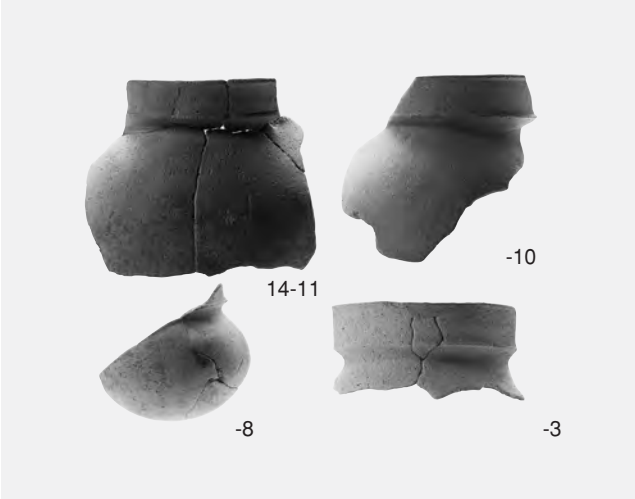

10-2
-3

13-2


11-6
-5

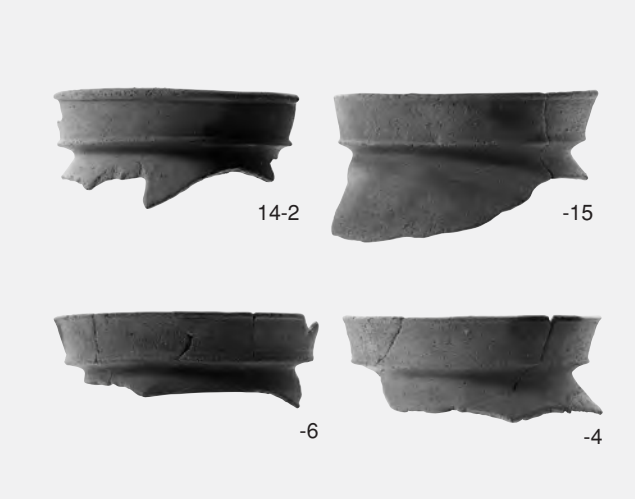

12-5
-1
-2
-3
-4
13-1

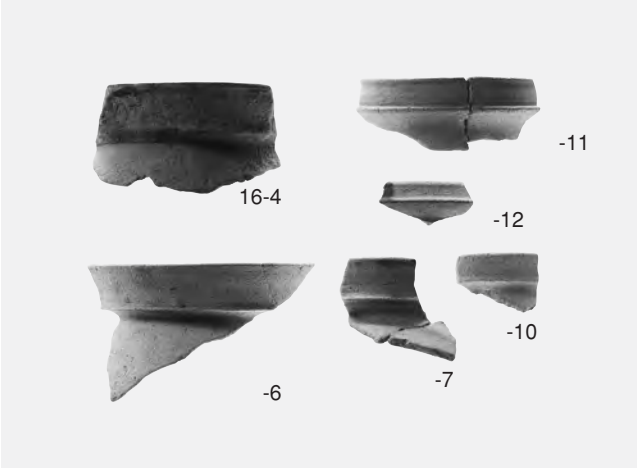
12-8


14-11
-10
-8
-3

12-6

図版 4　古墳時代前期出土遺物




16-4
-11
-12
-10
-7
-6

17-1

17-2

17-3

18-4

18-8

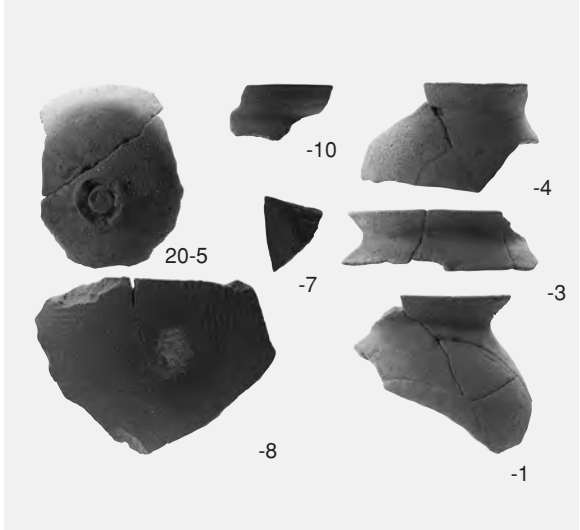
18-9

18-10

18-14

18-16

図版 6　弥生時代終末期以降出土遺物



19-5

19-5

報 告 書 抄 録

ふ り が な	たかおかにいせき
書 名	高岡Ⅱ遺跡
副 書 名	北本町谷田谷線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	
シ リ ー ズ 名	出雲市の文化財報告
シリーズ番号	17
編 著 者 名	遠藤正樹
編 集 機 関	出雲市文化環境部文化財課
所 在 地	〒693-0011　島根県出雲市大津町 2760　TEL (0853) 21-6893
発 行 年 月 日	平成 23 年 (2011) 3 月 18 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高岡Ⅱ遺跡（たかおかにいせき）	島根県（しまねけん） 出雲市（いずもし） 高岡町（たかおかちょう） 416-2 417-2 418-3	32203	W265 (島根県遺跡番号) C 26 (出雲市遺跡番号)	35 度 22 分 58 秒	132 度 45 分 33 秒	2009.11 ～ 2010.3	500 ㎡	北本町谷田谷線道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高岡Ⅱ遺跡	散布地	弥生時代 ～ 古墳時代		弥生土器 土師器	手焙形土器が出土

要 約	今回の調査では，遺跡が北方・東方に広がり，遺跡の南西縁辺部であることが明確となった。また出土遺物から，遺跡の初現は弥生時代前期であり，遺跡の最盛期は古墳時代前期であることが確認された。調査区外北側には，東西に旧自然堤防が広がっており，遺跡の広がりから，旧自然堤防上に集落遺跡などが存在する可能性も考えられる。遺跡からは近畿地方を中心とする地域で多く出土する手焙形土器が出土しており，当遺跡周辺で他地域と何らかの交流が持たれていたことが考えられる。

出雲市の文化財報告　17

高　岡　Ⅱ　遺　跡

北本町谷田谷線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 23 年（2011）3 月

編　　集　出雲市文化環境部 文化財課
〒693-0011　島根県出雲市大津町 2760
TEL（0853）21-6893

発　　行　出 雲 市 教 育 委 員 会
〒693-8530　島根県出雲市今市町 70
TEL（0853）21-6874

印刷　製本　株式会社 報　光　社